

*EYES*

## 一章 最悪な出会い

あたしは最近、ロクなことがない。そろそろ誕生日だというのに、気が滅入ることばかり起こつてる。

足を踏み外して地下鉄の長いエスカレーターを滑り落ちたり、歩いていたら麻雀荘の古い看板が落ちてきて頭に直撃しかけたり、涎を垂らした野良犬四匹に追われたり、暴走ダンプの下敷きになりかけたり。反射神経はいいほうなので、どうにか難を逃れてきたけど、十六歳の身空で遺書を書いておかなきゃならんかと思うほど最悪続きだ。

こんなブラックな状況と気分を追い払い、心機一転するためにあたしは決意した。高校生活をバラ色にするためにも、ずっと恋焦がれていた檀君に自分から突撃することを。

そして、十七歳の誕生日を迎えたその日、あたしはフラれた。木っ端微塵の玉砕で、心機一転はお先真っ暗大暗転。

「気が強い女はニガテで」と、即答されて、呆然。

気が強い？ あたしの？ どこが!? つうか、こんなフラれ方って、ありえなくない!?

あんたに告白するのだって、一年二ヶ月半悩んだのよっ。去年の四月、入学式に一目ぼれしてか

ら、どんだけ毎日恋焦がれてきたと思ってるの？ 一年二ヶ月半、自分の勇気のなさにむせび泣きながら、こっそりあんたを眺めてきたわけよ。

「おはよう」って声かけられるのもためらって、それだけでバコバコもんよ、心臓が。「おはよう」って返ってきたら、「ああ、今日も頑張って学校に来てよかった！」と、夢見心地になれたのよ。それだけでも幸せだったけど、やっぱりガマンできなくて。

なのに、思い切つてキモチを告げた健気な女の子に、そういうこと言うかよ!?

びっくりして。びっくりしすぎて、手にしていた学生カバンでバコツと殴ってしまった。

頑丈な革の鞆を振り上げながら、「今日は教科書が多い日でしかも英語の辞書まで入ってるんだつた。重くて痛いかも」と思ったのに、止められず、振り下ろしていた。

檀君は、「うっ」と声を発して、体育館裏の湿った土の上に倒れて、ノビてしまった。

「あんた一生、檀と口きけないね」

校門あたりで事後報告を待っていた文月ふづきを携帯で呼び出して、二人で檀君を保健室まで運んだ。

「重い！」と文句タラタラで足のほうを抱えている文月は、小学校時代からの友達で中学も同じ、高校も同じとこに合格した上に、二年でクラスまで一緒になった腐れ縁だ。

その後の保健室で、あたしは、養護教員とクラス担任にこつてり絞られてしまった。

「バカモノ！ 首の骨折つて死んだらどうするんだ!」

と、怒鳴られる始末。担任の大鳴おおなり、通称・怒鳴りの大鳴に頭を数発叩かれながら、先生だつて叩いてるじゃんよ、と文句を言いたいのを堪こらえていた。

「大体、学生の本分は勉強なんだよつ。ナニ色気づいてんだ、バカモノが。告白なんか十年早いんだよ!」

そんなこと言つてたら、先生みたいに三十過ぎても独身になるじゃんか、とは、さすがに言わない。それくらいの知恵はある。運んでから十五分、大鳴先生の怒鳴り声で、檀君の目も覚めたらしい。ほつといてあそこに置いたままでもよかつたかも、と、心の中で毒づく。好きなキモチなんて、一瞬で冷えきってしまった。あたしの一年二ヶ月半は、何だったの？

檀君は、先生のお説教を制して言った。

「俺、全然平気です」

痛そうに頭を左右にひねって、動くのを確かめてから、上半身を起こした。

「大丈夫？ 気持ち悪くない？ 吐き気とか、頭痛とか、目がおかしいとか」

養護の先生が、檀君の顔を覗き込むようにして質問している。

檀君は、「平気です」とはにかんで答えて。それから体をすらすらして、あたしのほうを見た。

「高橋たかはし。ごめん」

思わぬ「ごめん」の言葉を聞いて、驚いてしまう。何も言えなくて、彼を見ていたら、

「俺が言いすぎた。ごめんな」

もう一度、真剣な顔で、あたしに「ごめん」を言ってくれた。

……だから、好きだったんだなあ。一目ぼれしてからも、あの真っ直ぐさというか、頭も良くて器用そうなのになと見せる不器用さ、男の子らしい素直なところを知るたびに、ますます好きになつ

ていった。

文月におごってもらったマックのポテトとアップルパイと苺シェイクを前にして、あたしは悲しくなまって泣いてしまった。フラれたことよりも、いい人だっけ知ってたのに、とっさに殴ってしまった自分がブルーだった。

「奮発してごちそうしてるんだから、元気だしなよ。こっちがおごってほしいくらいだよ。あの重い檀、運ぶの手伝わされて」

泣きながらパイにかじりついていたら、呼吸と返事に詰まってむせそうになってしまった。

「いいよ、今日はさ」

いちゃもんをつけてから、文月はちよつと満足げに笑った。

「ガマンしてたんだよね、あたし。去年の入学式からずっと」

文月が頷いて相槌を打ち、あたしも頷いて言葉を続ける。

「心臓バコバコでさ。いざってなると、やっぱりバコバコで」

「うん」

「でも、やっぱ駄目で。いざとなったら痛いかもって思ったのに止められなくて。やっぱり我慢できなくて。檀君が『うっ』て叫んでから、いけないことしちゃったって青くなって」

「ちよつと待って」

「確かにバコバコしてて、よくわかんなかったけど」

「待って！」

手で制されて、ぼかんとして文月を見る。

「なに？」

「あんたの話、微妙なんだけど。それは、体育館裏で、告った話でいいんだよね？」

「そうだよ」

「体育館裏で、初体験した話じゃないんでしょ？」

「——違うよっ！ ナニ言ってるのっ」

「隣のテーブルの子たちが、へんな顔してこっち見てたよ。あんたの話、微妙なんだよ。なんか、卑猥ひわいっていうの？」

文月が、「微妙」を繰り返して言う。

「ガマンできないだの、バコバコだの、痛いだの。うっ、て叫んでとか、やめれ。並べるとマジエロくささ」

「エロくさい!? やめてよっ。文月はエロ漫画を読みすぎなんだよ！」

「漫画は芸術よ」

「ええ？ あのすぐに脱いじゃうやっちゃうの話が？」

「そういうのばっかじゃないし。……それより」

「でもそういうの、多くない？ この間、文月から借りたレイプものも怖かったよ？ 俺がイカせてやるよとか、俺じゃないとイケない体にしてやるよとか、犯されても体は正直だとか。ふざけてるよ、レイプはレイプじゃん」

「そうなんだけど。いや、そうじゃなくて。あの話は、男の心にある深い闇が、癒いされていく繋つがりについてさ。そうじゃなくて、後ろ」

「癒いされていく繋つがり？　なんかやらしー」

シェイクを飲んでケタケタ笑っていたら、目を見開いている文月の顔がただならぬ様子だったの  
で、何事かと思つて視線の先を見た。あたしの背後。

見知らぬ外国人が立っていた。どう見ても外人。胸の下あたりまで伸びているまつすぐな金髪が  
けでなく、目鼻立ちからもわかる。サングラスをしていて瞳の色は見えないけれど、背が高く、  
手足の長さも頭身も日本人とはまるで違う。

その外人は、あたしのほうを見ていた。正確には、あたしたちのほう、だと思ふ。

ストローをくわえたまま、あたしはその外人を見上げた。文月を振り返つて「知り合い？」と訊  
くと、勢いよく首を振り返される。外人を眺めたままで。

「高橋阿見香あみかつて、どっち？」

透明感のあるハスキーな声を聞いて、男だったのか、と思ふ。身長が高くて、髪が長くて顔立  
ちも綺麗だから、どっちなのかわかりにくい。文月があたしを指差すと、

「こいつ？　さつきからレイプだのイカせてやるだの、犯されても体は正直だの、頭がおかしい発  
言を大声で繰り返してる、これ？」

日本人かよと思ふほど堂に入った日本語を操あやつり、親指であたしを示して、その外人は深刻そうに  
首を振つた。

「最悪」

「なにが？」

カチンときて、聞き返す。初対面の人間に、「最悪」つてなに!? 「最悪」つて！

「勘弁してくれ」

「はあ!？」

その男が後方を振り返つた拍子に、別の外人がさらに二人いるのが目に入った。男性と女性。肌  
が浅黒い、背の高いモデルみたいな男性と、向日ひまわり葵色あいらの金髪でふわふわ頭の、すごく綺麗な女性だ  
つた。

「失礼よ、ミカエル」

女性も流暢な日本語で言い、心から申し訳なさそうにあたしを見た。

「念のためにどっちか訊きねてみたが、最悪さいあくとしか言いようがない。失礼もなにも、女扱いどころか  
人間扱いもできないね、こんなやつ」

「だからあんた、さつきから何なのよ？」

夕方の、混雑しているマツクの中は、静まり返っていた。この外人三人がやたら目立ちすぎて、  
誰も彼も度肝を抜かれて見入っている。あたしだって、こんな三人、雑誌でもテレビでも見たこと  
ないくらい。でもすぐく腹が立つて、この三人と一緒に注目を浴びてる事実を気にしてる余裕も  
なかった。

「あんた？」

サングラスの奥で、男が目をすがめたのがわかった。

「あんただって、すごいひどいこと言ってるじゃん。文句ある？」

「バカはすぐにケンカを売る」

「はあ？」

「ミカエル！」

女性が割って入ろうとしたとき、再び首を振ったその男が身を翻して立ち去ろうとした。

「無理。こんなやつ」

「そうは言っても」

歩き出すのを止めようとする女性の手を避けて、肩越しにチラッとあたしを見た。

「こんなやつと結婚なんかできない」

「……………結、婚？ ケッコナーリー！」

とつさに立ち上がり、その外人の腕を掴んで怒鳴っていた。

「なに言ってるの？ あたし、あんたのことなんか知らないし！ あんたのほうがよっぽど頭、おかしいよ。イカれてんじゃないの？」

「他人への口のきき方も知らないのか」

「ピトに言える言葉!？」

「触るな。バカが移る」

気づいたときには、その外人の頭がピンク色になっていた。金髪も、黒いサングラスも、顔から

胸元にまでピンクの流れが滴っている。飲みかけの苺シェイクの中身を、その不愉快極まりない男めがけてぶちまけていたらしい。怒り心頭で。

そして、呆然としている男にさらに、クシャツと潰したシェイクのカップを投げつけた。

「なにふざけてんのか知らないけど。こっちこそ願い下げだわ、あんたみたいなの。この世から男が全部いなくなっても、あんたなんかまっぴらゴメンよ」

啖呵を切って、文月を「帰ろう」とうながし、人垣を掻き分けて店の外へ出た。文月が目を白黒させて、息を切らしながらついてくる。

「どういうこと!? どういう知り合いなの!？」

「知るわけないじゃんつ、あんな失礼なの!」

「でも、名前言ってたよね？ 高橋阿見香って」

一心不乱で歩くあたしの腕をグイッと掴んで止まらせる。

「結婚って、なんなのよ？ 阿見香っ」

「だから、あたしも何も知らない」

「あんた、今日、檀に告ったばかりじゃん？ なのに、結婚って、なんなの!？」

文月に攻め寄られて、マックにいたときよりも脳ミソが混乱してきた。

「だから、知らないんだって!!」

スクランブル交差点の真ん中で、叫び返していた。怒り心頭、アンド、超パニックで。

あたしの父親は、外国人だったらいい。らしい、というのには、一緒に暮らした記憶がないから。あたしが三歳のときに他界して、うちには写真が一枚あるだけだ。しかもお母さんは、その人と籍を入れずにあたしを産んで認知もされなかったもので、あたしは私生児になっている。

俗に言うハーフ、なんだけど、お母さんの血が強烈に濃すぎたのか、あたしはどこからどう見ても日本人そのものに育った。髪の色、肌の色、顔の作りも体型も日本人で、よく見れば肌が白いか鼻筋が外人っぽいとか、足が長めとかたまに言われる程度だ。

ただ、瞳の色は、普段は黒なのに、太陽の光を受けるとちよつと緑色がかって見える、フシギな色をしてるらしい。外で鏡を見てるわけじゃないので、自分じゃよくわからないけれど。

生まれも育ちも日本で、外国には旅行に出たことすらない。あたしにとつて外人も外国も、遥か彼方の存在なのに、それがいきなり名前も知らない外人と結婚して。ありえない。

お母さんは、世間で言うところのシングルマザーで、女手ひとつであたしを育ててくれた。母一人一人の生活もそう悪くはない。十年は住んでいる六畳二間のアパートで、仲むつまじく暮らしている。

夕食の支度をしていると、お母さんが帰ってきた。

「今日はなに？ え？ 野菜炒め!？」

「豚肉入りだよ。後は温泉卵のせ冷や奴、コチュジャン風味。と、お味噌汁。上等じゃん」

仕事で遅くなる日が多いから、あたしが晩御飯の支度の大半を担当している。文句でもあるのと口を尖らせたなら、せつかくの誕生日にと呟いて、肩を落としている。

ああ、そうだった！ 忘れてた!! 失恋のショックと、あの無礼なパツキンのせいだ。

「誕生日なのに、あなたに食事の支度をさせてる私も悪いんだけどね」

ケーキは買ってきたからと、テーブルに白い箱を置く。結構大きくて、かなり奮発してくれたみたいだ。給料日前なのに。うちは貧乏ではないけど、余裕がある生活でもない。

指についたコチュジャンを舐めながら、「ありがとう」と、気楽さを装って言う。恥ずかしさが先立つて、子供のときみたいに大袈裟に喜ぶことが、もうできないお年頃だ。

「プレゼントは、お給料が出てからね。ボーナスも入るから。もう少し待って」

「いいよ。別に」

嬉しいけど、無理しないでほしい。そんなことも、言いにくくて。

突き放した言葉になってしまった気がして、スーツを脱ぐ母親から目をそらした。

毎日一本だけ飲む三五〇mlのビール、お母さんの楽しみをコップに注ぐ。生き返るわ、なんて喉を鳴らして飲んで、満足そうに息をつかれると、あたしも安心する。

「阿見香も一口どう？」

「ごくたまに、未成年だけど、晩酌に一口だけ付き合う。」

「これをおいしいとは、なかなか思えないね」

「早く大人になりなさい」

苦さに口を歪める娘を見ながら、冷や奴を頬張って笑っている。

十七になったばかりだからまだ時間はかかるけど、早く楽をさせてあげたいと思うあたしはマザ

コンなんだと思う。だから時々、記憶にない父親を責めたくもなる。なぜお母さんをシングルマザーにしたの、って。死んじゃったから、だけじゃなくて、なぜ認知もしてくれなかったの、って。望まない子供だったのかもしれないけど、お母さんのことをちゃんと思いやつてくれていたら、認知しないとかありえない。ご飯を食べながらそんなことを思い、ふと顔をあげた。

「お父さんの写真、あったよね？」

たぶん十年近く、あたしは父の写真を見ていない。見たくなかったから。

父親がいなくてよく虐められてきたし、父なんか嫌いだとずっと思っていた。

見てもいい？　と言うあたしに、お母さんは、どういう風の吹き回しかしらと言いながらも、どこか嬉しそうだった。寝室の鏡台へ行き、引き出しを開ける。そんなところにあつたのか、と母親を眺めていると、繊細な銀細工の写真立てに収められた古い写真が目の前に置かれた。見知らぬ外国人の男性と、まだ若いお母さんがいる。それから、男性の胸に抱かれている、白おくるみに包まれた赤ちゃん。

「これ、あたし？」

「そうよ」

お母さんが、幸せそうな笑顔で頷いた。写真で見ても、わかる。赤ちゃんのあたしが、そつと慈しむように抱かれているのが。小さい頃に見たときにはわからなかった、愛情みたいなものが、伝わってくる。

「すごく、ハンサムな人だね」

素直に、そう思う。で、あたしはやっぱり、どこもかしこも母親似なんだなって。

お母さんがブスだとは思わないけど、平均的な東洋人顔っていうか。

娘の感想に、お母さんが微笑んで、少女みたいにはにかむ。

「どういう人だったの？」

「……また、おいおい、話すわ」

あたしの問いに、寂しそうに答えた。

「一つだけ。阿見香。あなたの名前は、この人が付けたのよ。漢字は、私が考えたの」

言いながら、じつと見つめてくる。

「瞳が、お父さんと似てるのね。とても美しい、エメラルド色の瞳をしていたのよ」

写真を見ながら、あたしは別のことを考えていた。写真に写る父は、今日会った外人にどこか似ている気がする。あの人はサングラスをしているも顔立ちの綺麗さがわかる、ズバ抜けた美貌の持ち主だった。それと比べるとハンサムさでは写真の中の父のほうが半分以下だけど、どこがって言えないものの、なんとなく似ているように思える。同じ外人で、白人だからかもしれない。日本人と中国人が海外の人から見たら見分けがつきにくいっていうのと同じかも。

「なんで、アミカ、って名前を、つけたのかな？」

お母さんは、しばらく黙ってから、そつと息をついた。

「それは……私も、わからないわ」



次の日、登校して教室に入ると、真っ先に檀君と目が合った。げっ、と思ったものの、気まずさをはぐらかしたくて「ゴメン」と手を合わせる仕草をしたら、「いいよ」ってカンジで苦笑してくれた。やっぱり人かもと、昨日に続いて再認識していたら、人差し指でちよっと手招きされたので、ドキドキしながら檀君の机のそばに寄る。

檀君が、周りにさっと目をやった。クラスメイトが聞いていないか確認してるみたいだ。「昨日のことなんだけど。……まあ、お互いに、気にしないでいいかない？」

「ああ、うん。そ、そうだよ。つか、あたしも、ものすごく……ってわけで、言ったんじゃないし」そんなわけじゃないんだけど、ぎくしゃくした関係になんたくなくて取り繕ってみる。

「クラスメイトとして、ま、これからもヨロシク」

彼も、あえて気にしないって苦笑を見せて言ってるから、声を潜めて続ける。

「俺、別に、嫌いってわけじゃないよ？ 昨日、言いそびれたんだけど」

「……そうなの？」

「大人しいほうが好みってのはあるけど。高橋のこともそこまでよく知らないから、答えに困って、とっさにへんなこと」

「でも、昨日、気が強いって」

「いや、それはわかるよ」

「そう？ あたし、気が強い？ 自分じゃ、まだまだだなんて思うんだけど。気弱すぎて」

「……………」

目が笑ったまま、檀君は沈黙している。

「自分観察苦手？」

「あ。それは得意」

普段から自認してるので正直に答えたら、檀君がお腹を抱えて笑い出した。そんな派手に笑うとみんなに注目されて、二人で何を話してるのか怪しまれるよと、あたしが慌ててしまう。

「むっちゃ天然入ってたんだな」

笑いを止めずに言う。明るいのを知ってたけど、二人だけでこんなに長く話したことがないので、新鮮に思えた。

「檀君って、よく笑う人なんだね」

「俺？ ああ、ヤバイキノコ食ってんじゃないかね？ って、たまに言われる」ヤバイキノコ。笑い草のことかと訊くと、頷きながら言った。

「俺のこと、檀君じゃなくていいから。みんな、ヒリって呼んでるし」

檀、聖。本名のヒジリからとってヒリと呼ばれている。男子も女子も、そう呼ぶ人が多いから、檀君にとっては特別なことではないらしい。

そう言われても、そんな馴れ馴れしくは呼べないよと思いつながら席を離れた。長話をしてると、目に付くし……と警戒していたそばから、四人の女子が顔を揃えてこちらを見ていた。いつも、「ヒリーリやだあ」とか奇声を発して、檀君に絡んでる子たちだ。中の一人はファッション誌の読者モデルもやっているお洒落好きな子で、その子を中心にグループになっている。気が合うか合わ

ないかは別として、あたしとはまったく違う価値観の子たちだと思って、同じクラスになつてから一言も話していない。

化粧禁止の高校なのに、読者モデルの島谷しまたにさんがマスカラをつけた目で睨んでくるのを、見なかつたふりで自分の席に着く。何か言われたら言い返せばいい。それだけのことだ。

靴から出した教科書を机に突っ込みながら、「あれ？」と思う。急いで教室を見渡して、文月がまだ来ていないのによく気づいた。普段はあたしより早く登校しているので、珍しくて、もう一度室内を確認する。……いない。休みなのかな？

予鈴が鳴ってから、遅刻ぎりぎりまで飛び込んできたときには、さらにびっくりした。

どうしたの？ 視線を送ると、気づかなかつたように文月は視線をそらした。こつちを見ていたのに。まさか昨日の夕方の一件を、まだ怒ってるのかな。あのバカ外人のせいだ。

授業が始まると携帯使用は厳禁なので、『遅かつたね。何かあつた？』と、机の陰で手早くメールを送ると、二分ほどで返信があつた。

『後で話す』

返信が来たことに安心して、携帯を机にしまふ。

怒ってるわけではなさそう。よかつた。そう安堵したのも、つかの間だつた。

「えー。今日は突然なんだが、転校生を紹介する」

大鳴先生が咳払いを言い、教室のドアから廊下に顔を出した。数秒を置いて、現れた顔に、あたしは言葉を失う。……あれは……あの男は。

一瞬、ここはどこ？ と、あたりを見回してしまった。斜め後ろの文月を振り返ると、口元にそつと人差し指を当てるジェスチャー。

ん？ どういう反応!? え？ 来ることを、知つてたつてこと？ なに？ どうして!?

「転校生の、ミカエル・ス……ス、マクラグドス君だ。……しかし、背が高いねえ、君。先生の三倍はありそうだな」

場を和ませる冗談のつもりなのか、慣れない笑いにチャレンジして、一人で乾いた笑顔を浮かべる先生。「いや、三倍もあつたら化け物ですよ、大鳴先生」とは、誰も突っ込まない。

クラス中が、呆然とした雰囲気、一点を見つめていた。

あの、外人。あたしが昨日出会つた、あの不愉快極まりない男の顔を。

見間違えるはずがない。サングラスがなくても、同一人物だと断言できる。どう逆立ちしても、高校二年には見えない態度とツラ構えで、あの外人が制服を着て立つている。公立校にしてはかなりオシャレと噂されている上衣短めな濃紺の学ランを、パリコレのモデルさながらに着こなして。

……制服に見えない。どこぞの国の王族に仕えるお仕着せのような。身近なものに例えれば、高級ホテルのホテルマンのような。行つたことはないけど。

六月に入って制服が夏服になつても、梅雨の肌寒い日には、学ランで来る男子も多い。白い清潔なシャツと、濃紺のネクタイの夏服も、この人なら素敵に着こなせそう。

つて、ホメてどうするよ、あたし！ それどころじゃないっ!!

「えーつと。みんな、びっくりしてるな。そうだな、じゃ、自己紹介を」

大鳴先生が、持て余した指揮棒を投げるがごとく、さつさと外人にその場を託す。

「只今、ご紹介に与りましたミカエル・スマクラグドスです。国籍はギリシヤです。名前の読み方はギリシヤ語読みではミハイルになります。どちらで呼んでいただいてもかまいません。よろしくお願います」

ギリシヤ国籍。腹が立つくらい流暢な日本語で、「本当に外人なのか!? 高校生なのか!?」と誰もが疑う立派な挨拶を手短かにされ、一同あ然。大鳴先生もかなり困った様子で頭を掻いている。四月からこれまで、こんなに困った顔をする先生は見たことがない。怒鳴りの大鳴と学校中で有名で、みんなからけむたがられていて、生徒に隙を見せる先生じゃないのに。

「じゃあ、席は……そうだな。高橋の隣。高橋大吾じゃなくて、女子な。阿見香のほう」  
「は？」

手を上げて、と言われる前に、あたしは反応してしまった。しかも、大声で。

「は？ じゃないだろ、高橋」

普段なら怒鳴つてるところなのに、先生が受け流す。あたしの両隣、空いてないんですけど？

「倉持。おまえ後ろに移動して……と言いたいとこだが、ス、スマクラグドス君、背高いんだよなあ。一番後ろじゃないと……どうすつかな」

呼び慣れない名にどもり、あたしの隣の倉持君に指示しておきながら迷い出す。すると、  
「後ろでいいです」

あの男からのひと声。

「じゃ、とりあえず、一番後ろの空いてるところで。後で席替えしてもいいな」

先生が君付けすることにも、しゃあしゃあと意見をする転校生にも、呆気にとられて。みんなが、教室の後ろへ移動する外人を見つめた。背筋の伸びた美しい後ろ姿は、思わず見惚れそうなほど。均整の取れた肩幅や頭身、腰にかけてのラインも足の長さも、日本人のものではない。

全校の男子を、一瞬にして敵に回す存在だわ、これは。昨日は解いていた金色の長い髪は、シンブルな銀の輪の髪留めで一つにきちんと束ねられている。学校指定の上履きではなく、黒いレザー・スニーカーを履いている足元まで、何か嫌な感じ。

椅子を引いて席に着くと、みんなが一斉に前へと向き直る。これ以上見ていたらマズイような、「いつまでも見てんなよ」的な、ピリツとしたオーラを発しているからだ。

あたしは前から二列目の自分の席から、文月のいる席とは反対側の斜め後ろ、外人男の席に目をやった。

あの男。一度もこつちを見なかった。先生があたしの名を呼んだときも、あたしが即座に反応したときも、こちらを見なかった。目を合わせる意思すら微塵もないらしい。

上等じゃんよ。世界で一番嫌いな男から、宇宙で一番嫌いな生き物になっただけだわ。休み時間になっても、教室は静まり返っていた。あの迷惑すぎる存在感のせいだ。

少しずつ椅子の動く音、ひそひそ話す声が広がって、あたしも文月に話しかけようとしたら、遅刻した上に日直になっていた文月は「また後で」と慌ただしく教室を出ていく。

すれ違いざまに一言、「あの外人、かなりヤバイかも」と、言い残して。

文月には、思わせぶりなことをチョロツと言う癖がある。案の定、授業の間、あたしは落ち着かなかった。ヤバイって？ ヤバイって何が？ 何があったの？ 文月ってば。

チラツと、あの外人のほうを振り返ってみる。こつちを見てたらずいなど思ったけど、見ていなかった。堂々と携帯をいじっている。授業中はダメだって、聞いてないの？ 転校早々に、先生に注意されて焦るのを内心で期待していたら、数学の先生は何も言わなかった。あんな隠さずいたら、気づいてるはずなのに。

授業の終わる数分前、もう一度そつちを見ると、まだ携帯をいじっていた。転校初日から、あの態度はどうよ？ 呆れて眺めていたところで、檀君と目が合った。あたしとあの外人の席を結んだライン上にいるので、自分を見ていると思つたらしく、ちよつと微笑んだ。あたしも、不機嫌さを慌ててひっこめて笑顔を見せる。その途端、頭に走った衝撃。

「高橋、何よそ見してんだ！ 最後の問題、おまえ解いてみる」

教科書でアタマをぶたれた挙句に指されてしまって、頭は痛いわ、気は動転するわ。

しかも、問題どこだかわかんないし。解き方すら聞いてなかったし！

正直に言うしかないの、さつさと「わかりません」と答えたら、もう一発ぶたれた。

「明日、もう一回指すからな。勉強してこい！」

昼休みは小雨が降っていた。梅雨らしい天気、文月とあたしは教室でお弁当を広げることにする。教室のドアの窓には、珍人生を見学にきた生徒、他のクラスの主に女子たちが、キヤアキヤア喚き

ながら張り付いていた。あの外人は、教室の隅の自分の席にいて、我関せずといった態度でミネラルウォーターを飲んでる。メシ食わないでいいんかい、なんて、心配なんかしてやらない。また携帯いじっているし。ケータイ中毒じゃないの？

「あの人さ。ゆうべ、うちに来たんだよ」

潜めた口調で文月が言い、仰天したあたしは口元まで運んでいた箸を落としかけた。

「タイミング良く私が出てよかったよ。外人がいきなり来て、しかもあの顔でしょ。親に見られたら大騒ぎになってたよ。明日から学校行くけど、自分の顔を見たとか、誰にも言うなって。知らん顔してろって。阿見香と自分が顔見知りだということも、人に言うなってさ」

「なにそれ!？」

叫びを辛うじて抑える。文月は不快そうに首を振り、あの男のほうは見ようともしない。

「しかも、電話一つですぐに君の父親の職をなくすことができるよ。約束できるっ？ ってさ」

箸を持ったまま、息を呑むあたし。

「それ、脅迫じゃん！ 何でそんなこと!? だいたい、なんで文月の家を知ってるの？」

「学校の名簿。何でうちを知ったのか聞いたら、そう言ってた。マックで、文月って名前聞いてたみたい」

「どうしてそこまでするの？ そんなことされる理由、ないよ！」

「言えるのは、阿見香の身辺は、くまなく調べられてそうってこと。尋常じゃないよね」

さらに声を潜めて、「まさか、ストーカー……」と呟くと、文月も深刻な顔であたしを見た。

「わかんないけどさ。気をつけたほうがいいよ。学校にまで潜りこめるって、普通じゃない。名簿も見られるってことは、先生も丸め込まれてるんだよ」

「ストーリーカーって、転校してきて、生徒のふりしてまで、嫌がらせすんのかな？」

「聞いたことないけど。只者ただものじゃないのは確かだよ」

予想もしなかった話に、あたしは大きな溜息をつく。なんなの、あいつ。初対面のあたしに意味不明なことを言ってきたかと思えば、学校にまで現れて。友達のことまで調べて、脅迫するなんて腹立たしきでムカムカしながら、「ごめん」と謝るあたしに、文月が「なんで？」と訊き返す。

「あたしのほうに心当たりはないんだけど。文月にまで迷惑かけて、ごめん」

「阿見香が悪いんじゃないし」

「そうなんだけど。でも、こうして喋ってくれて、ありがと。フツ、そんな嫌な思いさせられてたら、あたしと話すのもイヤになるでしょ」

「嫌っていうか、理由が見えないだけに不気味。あんなのことも心配だしね。しかし、いろいろ立て続けにあるよねえ。不運続きで生傷が絶えないと思ったら、今度は変な外人が登場するし」

「ご心配、どうも」

お弁当から、エビフライを取って、文月に渡す。

「それじゃちょっと安いなあ」

「今度、おごるから」

「マックのエビフィレオ、三回分で手を打とう」

三回分。抗議の言葉を呑みこむ。それで友情が保たれるなら、有難いと思わなければ。

了解、と返事をする、嬉しそうな顔をした文月に満足げに頷かれた。

「悪かったな、さつき」

昼食で移動していた机を戻していたら、檀君が謝ってきた。

「何の話？」

「数学の。なんか高橋だけ怒られて」

彼には全く落ち度がないことなのに、謝られてしまった。でもそこで、「あなたが原因じゃないよ」とか、「あなたを見てたんじゃないよ」とか、律儀に返すのも微妙すぎるので、気にしないで、とだけ答えておいた。

「数学、今日のところ、マジでわかんなかった？」

「今日のところ？ ううん。今日に限らず全滅」

「全滅かよ」

苦笑して、それから言った。

「教えてやろうか？ 数学」

ということ。放課後に、檀君に数学を教わることになった。

文月には、先に帰っていいからと告げたら、「なんでそうなる!？」と、ものすごい驚きよう。

「昨日、告つくってフラれた相手に、数学を教わる？ しかもマンツーマンで。おかしくない?」

「言われてみるとそうなんだけど、何か告ったことでちょっと親しくなってきた感じ？」  
「フラれたのに？」

「それは、好みのタイプじゃないからとかなんだか。大人しい女の子が好きなんだって」  
「自分で言ってる虚しくない？ 惨敗した相手のそばに、嬉々としているのもどうなの？」

何だかんだ言っても、そりゃあ喜んじやうわよ。この一日で、目まぐるしく感情や状況が動いて忘れかけていたけど、あたしは恋する乙女なのよ。

フラレはしても、想いは色あせるどころか、檀君がけっこういい奴だと再認識して、ますます強くなる。断られた一時は、冷え切ったように感じておきながら。

「私にはよくわからないね。あんたも檀も、なに考えてんだか。ついでに言えば、あの外人のほうがいいとわからないけど」

「それは思い出させないで」  
「お、突撃してる」

文月の視線の先を見ると、あの読者モデルの島谷さんとその取り巻きグループが、外人の周りに集まっていた。元凶の顔は女の子に囲まれていて見えないものの、キヤーキヤーとトキメキ発声が続いているところを見ると、あの男、まんざらでもなく相手をしているようだ。

女好きが、と毒を吐いてチツと舌打ちするあたしに、文月が意地悪く言う。

「結婚がどうか言われた身としては、複雑？」

「全然」

「何なんだろうね。いきなりの“こんなやつと結婚できない”発言といい、転入といい」

「こっちも、あんなのとは嫌です」

力いっぱい主張して答えると、文月は眉をひそめる。

「ねえ。ホントに心当たり、ないの？ 結婚だよ？ 結婚！」

「ない。向こうの妄想でしょ？」

きっぱりと言いつけると、片目を細める文月。

「その体で？」

「文句があるなら本人に聞いてきて！」

妄想です、と断言されてもイヤだけれどね。つたく、気持ちが悪いつたらありゃしない。

待ちに待った放課後になり、あたしは自分の身だしなみを入念にチェックした。

この高校は、女子は濃紺のセーラー服で、白いリボンとの組み合わせが清楚な感じで人気がある。進路希望では最終的に、制服で決めてここを受験した。ついでに文月も同じく。

夏服は白地に濃紺の襟で、冬と同じ白いリボン。これが、風になびくと様になるんだけど、白地だから食事のときにシミが付きやすく、ちよつとしたハネでも汚れが気になってしょうがない。今日の檀君との勉強会は教室は人がいるから屋上でとの話になったんだけど、行く途中で小さな汚れに気づいて慌てたものの、どうしようもなかった。ボブから伸びかけのバサバサ気味の髪をパパッと整えて、檀君の待つ屋上へ駆けていく。

申告どおり全滅の数学に笑いながら、檀君は丁寧に教えてくれた。

彼のことについて、あたしは、知ってるようで知らなかったんだと思う。笑い上戸じょうとなことか。屈託くつたくのなさとか、数学がなかなか得意とくなんだってことも。

額ぬかに落ちてくる黒髪くろかみが切れ長の二重にじゅうに影を作ると、憂うれいを帯びたイケメンに見えるのも。離れていてもかっこよく見えてたけど、コレはかなりツボ。近くに来て初めて知った。

他の子みたいに、「ヒーリ」って、甘えて呼んでみたくなったりして。ムリだけどさ。彼女じゃないのにベタベタする度胸どこぶはないし。ああ、気が弱い自分が恨めしい。

教えてもらおう合間に、転校生の話になった。

「六限目の体育、出なかったぜ。病弱びじやくで運動はダメなんだって」

「病弱!? あのでかい体で!? 血色けつしきの良さそうな顔して、ありえないでしょ」

見えないよな、と檀君たんくんも同意する。

「その間、体育館の周りをうろろしてたらしいぜ。今日は男子は校庭で、女子は体育館だっただろ。相当な女好きじゃなかったってウワサ出てるよ」

ま、男はみんなそっかな、と付け加えられたけど、「檀君たんくんもそうなんだ?」とは、訊ききにくい。

「さっきも教室で、女子に囲まれてたよ。まんざらでもなさそうに」

「高橋たかはし。辛辣しんらつだな? あの転校生に」

言外げんがいにはみ出た私情しじやうを、檀君たんくんが嗅かぎ取ったようだ。

「外人嫌がいじんきらい? 学校中の女子が色めきたってんのに。大天使たいてんしミカエル様とかあだ名つけて、大騒おほさわぎしてるだろ」

吹き出しそうになった。天使てんしって性格せいかくじゃないでしょ、アレは!

「なんか謎で。日本語ペラペラなのも怪しく見えるし、公立校こうりつがうに来るタイプじゃないよね」

ひっそり鼻で笑った、気持ちそのままの返答へんたうに、彼も頷うなづいている。

「マジ、謎だよな。外人は老けて見えるとは聞くけど、顔も落ち着おちき方も、二十歳はたち過ぎでも通とじそうだろ。ホントに高校生かよ? って思おもわないか?」

「思う。なんかエイリアン見てるみたい」

「ひでえ」

「だって、あの容姿ようさからして、現実げんじつ離れしてるじゃない」

「ってことは、かっこいいとは思おもうんだ?」

「世の中の的てきに見ればそうでしょ」

「高橋たかはし的には?」

「関かんわりたくない」

とっさについ、突き放した本音ほんねが出てしまって、訂正ていせいする。

「興味きょうみないってこと」

「やっぱ、強い強いなあ。おまえ」

「二日ふたひ続けて刺ささなくて」

ごめんと謝あやまられ、引ひいてるとか嫌きらがってる感じかんじじゃないのはわかってても、そう思おもわれるのは気持ちきもちが微妙びょうびょうに落ちる。大人おとなしい子が好きすきだって、聞いたばかりだしね……

「あたし、そんなに勝気に見える？」

「クラスの男子には評判」

衝撃。評判？ 勝気で評判!? あたし、心当たりがないんですけど!? と、絶句していたら、明らかにされる忘れていた醜態の数々。

「このクラスになって一週間ぐらい経ったころ、男子が物投げて遊んでたとき、水で濡れた上履きが高橋の机にビシヤッて落ちたんだよね。おまえそれに一瞥をくれて、モノも言わずに、投げた男子に向かつてバシッと叩きつけたんだよ」

覚えてない？ と言われ、首をブンブン振る。

「あつたとしても、ムカついてとかじゃなくて、持ち主に投げ返してやって、それで終わり、みたいな。覚えてないよ！」

檀君は、あたしの慌てっぷりに苦笑しつつ、言葉を続ける。

「その場にいた男ら、ぐえ〜〜〜つ、状態。あの女子には気をつけようって言った数日後。今度は、ほら、自習中に、アレ膨らましてクラス中が大騒ぎで遊んでたらさ。高橋が、自分のところに飛んできたソレを、壁にバンッと叩きつけて破裂させたんだ」

「……………それは、なんとなく、覚えてる。そのとき、あたし、日直で。ちゃんと自習させて、先生に言われてて」

「そうだったんだ？ みんな、おまえが日直だったって、記憶にないと思う。俺もだけど。その出来事だけが、くつきりしちゃって」

「つてか、アレってなに？」

「え？ アレって。膨らましてたの？ アレだよ」

「白いフウセンのことでしょ？」

「フウセン？」

プフッと派手に吹き出した檀君は、腹を抱えて笑い始めた。

「知らないで叩き割ったの？ アレ、ほら、避妊するやつ」

大笑いでさらっと言われ、モロに叫ぶあたし。

「……………え？ あれ、コンドームだったの!? 本物見たことないもん、知らないよっ」

なんて、後で思い出したら、死にたいくらい恥ずかしい自己申告までぶちかまして。

「シーッ、ばか！」

慌てて口を手で押さえられ、檀君の手の感触に浸る間もなく、あたしも焦ってあたりを見回す。

パラパラといる生徒が五、六人、訝しげにこっちを見ている。

とぼけて視線をさまよわせた直後、

「げっ」

またもや珍妙な声を上げてしまった。給水塔の上に、あの外人が座っていたから。しかも、こっちをじっと見てる。

「なんであそこに。つうか、こっち見てるよな？」

気づいた檀君も驚いて、いまの騒動も彼方にふっ飛んだ顔で目をばちくりさせてる。



アンタ、さつきまで女はべらして教室にいたじゃんよ？ 嫌な気分になって、再び手元の教科書に集中しているふりで何も見なかった顔をしていたら、

「高橋、めっちゃ顔コワイ」

そっちのほうが驚きという口調で、じつと見つめられた。一年二ヶ月半恋焦がれた人に。

「早々になんかあったの？ あの外人と。……あれ？ 朝もなんか、過剰反応してたな。先生が高橋の隣について指示したら、嫌そうに反応してただろ、思いつきり」

「外人恐怖症」

鬼の形相せきようそうを見られた虚脱感で、適当に返事をした。あいつとやりあったことは、檀君には知られたくない。もう充分、彼の中ではキツイ女になってるのに。まるで悪魔のごとく。

へえ、と檀君は物珍しそうにあたしを眺めている。

そろそろ下校しようというとき、家を訊かれて青梅方向と答えたら、「途中まで同じじゃん。一緒に帰ろう」と言われた。

マジで？ あたし、交際断られたんだよね？ 次の日から数学教えてもらったり、一緒に帰ることになったり。これはいいたい？ 文月じゃなくても、理解不能な事態なんですけど。

檀君と一緒にいるのは想像以上に楽しかった。彼に恋してる乙女のハズなんけど、気を遣わなくていいっていうか。彼が、人に気を遣わせない人なのかもしれない。それとも、やっぱり昨日の今日で、あたしが変に意識しすぎないように気を回してくれていたのかな。

幸せな気分と、でも彼女じゃないという事実の間をウロウロして、溜息。

まあ、いいか。一日ですごく親しくなれた気がするし。それもこれも告白しなければ起こらなかったこと、鼻歌を歌いながら駅の階段を下りて、徒歩で十五分の自宅に向かう。

見慣れた商店街を抜け、自宅のアパートが見えてきた頃。何か気になって、背後を見た。

……誰も、いない。気のせいかな。

二階建てのアパートの階段を上って、もう一度、階段や通りを確かめる。部屋に入ってから何だか落ち着かなくて、電気をつける前にカーテンの隙間から外を覗いてみた。

——ビンゴ。すごいカンしてる。あたし。

アパートの前の電柱の陰に、見覚えのある男がいた。あの外人。

転校してきたのとは違う、昨日マックで会った一人。肌が浅黒くモデル並みの風貌で、海外ブランドのメンズパンツ会社が土下座してスカウトしてきそうな、あの人。

鳥肌が立つ。あたし、寒気がしてる。……なんなの？ 不愉快とか最悪とか、散々悪態ついたけど、普通じゃないことがあたしを取り囲み始めてる気がする。

お母さんに言う？ 警察に言う？ 文月はダメだ、迷惑をかけたくない。いったい何が起こってるの？ 狙いは、あたし？ だとしたら、あたしをどうしようっていうの！？

翌日とその次の日は、平穩に過ぎた。学校でもおかしな変化はなかった。昼休みになると、この

クラスが、女の園か、はたまた動物園かと言われる環境になるのを除いては。

あの男も近づいてこないし、あたしも二メートル以内には絶対に近寄らなかつた。

何か変わったことはないかと気にかけてくれた文月に、尾行されていたことは伝えなかつた。次の日も、その次の日も、尾行はあつた。しかも帰りだけでなく、登校のときまで。

変化といえば、檀君とはけっこう話をするようになった。休み時間になると「ヒリーイ」と、取り巻いていた読者モデル代表グループが、あの外人にくっついて歩くようになって、檀君もヒマになつていたのだと思う。

土曜日と日曜日は、待ちに待った安息日だつた。サイコーにくたびれた一週間。

月曜日が始まると、またあの男に会うのかと思うと気が重くて重くて、どうにかしてズル休みはできないか思索したものの、今日休んでも明日も明後日も学校はあるんだとゲンナリして、行く覚悟を決める。

覚悟なんて、決めなきゃよかつた。朝のホームルーム早々、あたしは生き地獄に突き落とされたのだから。大鳴先生が、「先週予告していた席替え」を実行したのだ。一番後ろの窓際、あの外人。その隣、あたし。二メートルどころか、一メートルも距離がない!!

「先生！ 黒板見えません」

移動するやいなや、訴えた。もちろんウソだけど。

「見えなきゃ隣に聞け。じゃ、授業を始める」

なんだとお？ 何なの、その横暴さは！ 一時限目は大鳴先生の授業で、ホームルームからその

まま流れ込んでしまつたので、しょうがなく席に座る。左、目障りな外人。右、……右は……

「檀君!？」

最悪なんですけど、いろんな意味で。気が休まらないッ!

この場合で組む「お隣さん」というのは、左と決まつている。左の左は誰もいないから。

黒板が見えないなんてウソだから、別に世話になる必要はないんだけどね。と思つていたら、一時限目の教科書をど忘れしていた。家を出る直前まで、行きたくなくてウダウダしてたせいだ。

檀君に見せてもらおうと様子を窺<sup>かが</sup>つてみれば、なんとということでしょう、檀君の右隣の子も忘れてる……

マジかよ!? 頭を抱えて渋々諦め、「スミマセン」と、左のヤツに声をかけた。マックで口きいて以来だよ。一生、話したくない相手なのに。

教科書を、と言いかけて見てみれば、ヤツの机の上に出てるのは携帯だけ。

「教科書は?」

真顔で尋ねたら、

「いらぬい」

ツンとした態度の返事。

「あんた、何しに学校来てんの?」

自分の有様を柵に放り投げて言うと、

「来たくて来てるわけじゃない」

明らかに不機嫌な口調で返された。だつたら来んなよ！ と毒を吐きそうになるのを堪えて、あたしは黒板を眺める。一限目の科目のノートはあったので、やる気なく書きなぐりながら。

大鳴先生は、あたしが教科書を出していないと絶対にわかってたのに、何も言わなかった。怒られたいわげじゃないけど、おかしすぎない？ ここ、二人並んで、教科書を出していない生徒がいるんですか？

休み時間は、文月の席に入り浸りになっていた。自分の席にいられないなんて悲しすぎる。席替えはわざとで、先生もグルだと文月も頷いた。

挙句、不幸は続くもので、チャイムと共にのろろと魔の席に戻れば、ちようど入ってきた先生が「抜き打ちテストをする」と、のたまった。数学の。勘弁してよとげっそりしても、学生はテストから逃れられない身分なのだ、残念ながら。

三十分のテストは、先日、檀君に即席で教えてもらったもの以外は壊滅的だった。

そしてこの後、あたしはさらに地獄を見ることになる。先生の一声で。

「はい。隣の人と答案取り替えて。採点してくれ」

……隣？ このカイメツテキな答案を、右隣の檀君じゃなくて、左のヤツへ。

右でも困るけど、左は……絶望的。公衆の面前で、「バカが移る」と言われたあたしなのよ。こんな答案見せたら、未代まで何を言われるか！

赤くなったり青くなったりしてるとコロへ、隣からヒラリと答案が来た。教科書はいらないと断言する人間が、テストなんか受けなくてもいいじゃないの。

なけなしの勇氣をはたいて、隣を見ずに答案を差し出す。沈黙が、コワイ。今日、席を並べてかみらずと沈黙でいたから慣れているはずなのに、その沈黙が、凍ってる気配がする。

気配がする、なんでもんじゃなくて。左隣から来る空気が、バリバリ凍ってるよ……

いいよ、いいよ。一日中、携帯ばつかいじってるアンタだって、期待できるもんじゃないでしょ？ と、意地悪な希望を託してみたら、非常に美しい答案に目が釘付けになった。

まっさらで美しいじゃなくて。綿密に、サラサラツと書かれてる数字が、形が整っているのに硬すぎず、すごく綺麗なの。名前の欄には筆記体で、流れるカリグラフィのようなローマ字。答案の名前が、芸術になっている……。その顔で、この字は、卑怯じゃない？ 揃いすぎじゃない？ 黒板の答えと確認していくと間違いは一つもないし。赤ペンでいびつな丸を書くのも嫌になり、溜息をついてそっと左隣を見た。

ヤツも、こつちを見ていた。信じられない、つて顔をして。それから答案に視線を戻すと、微かに首を振りながらペンを滑らせる。呆れてモノも言えないってカンジが、ありあり。

そして、触るのも嫌だ、一瞬も見たくないって態度で、サツとこつちの机に答案を放った。二問以外、全部ペケ。赤ペンのペケまで、まあ優雅な感じですること。

声に出さずにぼやいていたら、隣からの冷ややかな吹き。

「何の病気だ？」

「はい？」

あたしに聞いているの？ と、尻上がりの返事に疑問を込めたら、

「脳ミソ。どんな異常が起ればそこまでバカになれるんだ」

口にするのも汚らわしいと言わんばかりの嫌味さで、そっぽを向かれた。

………。この男だけは、殺していいかな。あたしの視界から抹殺したい。同じ星に生きてると思うだけで、暴走しそうな殺意が湧いてくる！

「外人恐怖症、発動中？」

右隣の檀君が、トントんと、指であたしの机を鳴らした。からかっているのか、宥<sup>なだ</sup>めているのか、微笑を浮かべて気安く訊かれる。

「絶好調」

不機嫌に言えば、プツと吹き出す音がして、あたしは檀君を睨んでしまった。けっこう、イイ性格してるよね。いろんな発見があつて、良く言えば新鮮<sup>新鮮</sup>だけだ。

授業が終わると女の溜まり場になる隣の席は、人垣があたしの席を勝手に押しつけたりして、大迷惑だった。でも、ちらちら窺<sup>うかが</sup>っていると、奴が積極的に話をするとはなくて、一言二言発した言葉を女の子たちがキヤアキヤアと面白おかしく広げてる印象。隙間からちよいと観察すれば、奴は無関心そうに冷めた目をしている。

沢山の女子に囲まれて、「オレってイケてるぜ」的なナルシストに浸<sup>ひた</sup>るタイプでもないのか。いや、いいんだけど。どんな男でもさ。あたしの中の「コイツ、サイテーッ!!」って感情が覆<sup>くつが</sup>ることは、一生ないだろうし。

放課後。職員室に飛び込んで、あたしはクラス担任を掴まえた。

「大鳴先生！」

あたしの剣幕にビビったのか、大鳴先生がギョツと振り向く。

「なんで席替えで、無理矢理あの男の近くにするんですか」

「あの男？ スマクラグドス君か。仲いいんだな」

は!? どういう解釈で、そういうカンチガイになる!?

「ありません」

「ケンカでもしてるのか？ 許<sup>いいな</sup>婚<sup>な</sup>なんだろう？」

イイ？ ……ナズ…ケ？ ——許<sup>いいな</sup>婚<sup>な</sup>————!?

どっから、どうして、そうなるの!? ショミミ、もとい初耳なんですけど!?

このときのあたしの気持ちは、どう言い表せばいいのだろう。アタマの中で、富士山が一万個くらい爆発してる。そんな感じ。まじで。

「死んでもありません」

呆然と、呟いた。

先生は「恥ずかしがらなくてもいいよ」などと、素晴らしい勘違いでニヤニヤしている。

「あれ？ でもおまえ、つい最近、告白してどうのとかやってたよな。檀をカバンでぶっ飛ばして。

「二股はやめろよ？」

「だから、知らないんですっ」

完璧に誤解している先生に腹が立ち、勢いあまつて、先生の机をバシッと叩いてしまった。

「説明してください。どういう人なんですか？ あの外人」

先生は目を白黒させながら、あつげにとられている。

「さあ。校長先生のお達しでな。ひれ伏さんばかりに扱ってるからな」

校長先生が!? グルだったのは、校長なの!?

「ここだけの話、スマクラグドス財閥と関わりがあるんじゃないかって、職員室でも噂なんだ。おまえのほう詳しいんじゃないか?」

まだ許婚だと思ひ込んでるらしい先生が、あたしに話の矛先を向ける。

「スマクラグドス、ザイバツ?」

「大財閥だよ。世界最大の財閥でもあるが、メディアにはあまり情報を流さないところで、謎が多いと言われてる」

ほんとに知らないのか? って調子で、ブリッコでも疑うように苦笑いで見返される。

「そんな人とあたしが許婚なんて、ありえないと思いませんか?」

何を聞いてもよくわからなくて、そう言ったら。

「俺に聞くなよ。おまえのことだろ?」

何言つてんだと鼻であしらわれる。あたしは、もう一つ不審に思っていたことをぶつけた。

「あの人、高校生には見えませんよね。ほんとに同い年?」

本当に何も知らないのか、と眉を寄せて、怪訝な顔を始める大鳴先生。

「十九だよ。他の生徒には言えないが」

「十九? ダブリ!」

二つも上で、なんで高二のクラスに!?

「大学を卒業してるって話だ。あのケンブリッジ大学を、十一歳で首席卒業してるそうだ。飛び級で、九歳で入学してな。トリニティ・カレッジに通ってたとかどうか」

……………。あ然。

その経歴が、どれほどすごいものなのかは実感が無い。けど、あたしでも知ってる、世界でも超名門の大学で。九歳で入学して、首席で卒業! ランドセルを背負ってる小学四年生が、大学に通ってる図を想像してみても——ありえないって!

同時に、今日見せられた答案が、脳裏に浮かぶ。あの、芸術的でいて、ものすごく頭が良いのは、と思わされたアレ。内容もあっさりパーフェクトの。

マジで? そんな人間が、この世にいるの!?

……そりゃあ、脳ミソが病気だの異常なバカだの、言い切れるでしょうね。

あいつの性格が、読めた気がする。傲慢で不遜で態度でかくて。人を平気で見下して、それを隠しもしない。自分以外の人間は、みんなバカでサル以下だとも思ってるんじゃないの? だいたいなんだってそんな人が、平々凡々な公立校に潜り込んでるわけ?

……理由。もしかしなくても、今までの流れと先生の口ぶりから言って、あたしってこと?

“来たくて来てるわけじゃない”と、のたまったアイツ。

そろそろ。いや、いい加減、事情を吐いてもらおうじゃないの。

翌日の昼休み、やっとこさで決意を固めたあたしは、女の子の群れを掻き分け、サッとヤツの机の前に立ちはだかった。

「ちよつと顔かしてくれる？」

眉を上げてこつちを見る男と、真正面から対峙たいじすることになり、そのとき初めて寸分の狂いもないこの男の顔を、きちんと見た。……一瞬、怒気が消え失せた。あまりにも綺麗で。マックで会ったときはサングラスをしていたし、それ以降は視界に入るのも嫌で見ないふりをしてたけど、じっくり見ると、用意してきた言葉が全部消えた。怒りと共に。

大天使ミカエル様が降臨されたと、全学年の女子たちがのぼせているのも、納得してしまう。

見たこともない、エメラルド色に煌きらめく瞳。吸い込まれそうになる。

……エメラルド。とても美しい、エメラルド色の瞳をしていたという父を、思い出した。もしかして、お父さんの瞳も、こんな色だったのかな？

「ちよつと！ ミカエル様になんの用なの？」

溜まっていた女子に口々に問われ、すぐ済むからと言いかけたら、ヤツが片手を軽く上げて、「少し静かにして」と彼女たちの文句を制した。

「やっと謝罪する気になったんだ？」

訊かれて、眉を寄せるあたし。

「謝罪？ なんであたしが、あんたに、謝らなきゃならないの？ こつちこそあんたに、釈明してほしいことがあるのよ」

「謝罪について、まったく心当たりはないと？」

「まったく。それより、ここ数日付きまとってるあんたの友達について」

話してる途中で、男が立ち上がった。場所を変えるためかと思いきや、男は、机に置いていた飲みかけのミネラルウォーターのボトルを手にする。

持っていくつもりかと見ていたら、その直後、あたしの頭の上から水が降ってきた。

四〇〇ccはあっただろうと、ぼんやりと、考えているあたし。そして、ペットボトルからの液体は、落ち切るのに時間がかかる、とも。流れてくる水を硬直して浴びながら、そんなことを考えていた。昼休みの騒々しい教室が、一気に静まり返る。

「やられたことは、やり返す主義なんだ」

言って、濡れそぼったあたしを見ながら、ペットボトルを置いた。

「シェイクじゃないだけ感謝しろ」

ボソツと吐かれた、冷ややかな言葉。

「あれは四〇〇ccもなかったわ」

自分の声が、奇妙なくらい、冷静に聞こえる。

怒りのマグマが、ゆっくりどうねり出す。あたしの中で。

「そういう問題じゃないだろう」

男の声も、冷静だった。

こいつは。こいつだけは……許せない。

「まさか、やり返すためだけに転校してきたんじゃないわよね？」

「まさか。君ほど暇じゃない」

「そーでしょうとも。一日中、携帯いじってるんだものね。授業なんか全く聞かないで」

「へえ。気にして見てるんだ？」

冷笑されて、そっぽを向かれた。教室を出ていく姿を見ながら、あたしはもう噴火寸前。濡れた髪が振り乱れるのもかまわず、右足の上履きを素早く脱ぎ、そのまま投げつけた。

バシッと小気味良い音を立てて、上履きが男の後頭部に命中する。また上履きが飛んだ！と男子たちが思ったかもしれないけど、そんなことにかまっちゃいけない。

振り返ったヤツの動きが、スローモーションに見えた。ゆっくりと息を吐きながら腕組みをして、眼差しで刺すがごとく見つめてくる。

「今、投げつけたのは、なんだ？」

「見てのとおりよ」

「……俺は、生まれてから一度も、人に手を上げられたことがない。シェイクを浴びせられたこともなければ、上履きや靴を投げつけられたこともない」

「そーでしょうとも。叩かれたこともないから、初対面の人間に、最悪なんて言葉をぶつける最悪な性格になったのよね」

こちらをじっと見つめたまま沈黙する男を、あたしも負けじと見つめ返した。教室は、恐ろしいほど静まり返っている。不自然に静まり返るシチュエーションを、最近はどれだけ体験したことか。

「やられたことはやり返すんでしょ？ どうぞやり返して。二倍でも三倍でも」

瞬<sup>また</sup>きもしないあいつの目を、きっちり見据える。

「受けて立ってやるうじゃないの」

不意にあいつが動いた。文字どおり、風を切るような早い歩調で。

ギリギリのところまでひるんで避けようとしたあたしの両腕が掴まれた。

この目は本気で怒ってる。やばいとわかりつつ、このまま引くのも癪<sup>しゃく</sup>にさわり、キッと睨み返す。

「放しなさいよ。逃げないから！」

ものすごい力で引きずるようにして教室を出ようとするので、抵抗して声を荒らげた。

こんな力、知らない。体の大きい、本気の男の力って、こんなに怖いんだ。

「放してっ！」

自分の絶叫に、自分で驚いて、唇を噛み締める。余計なことをしなきゃよかったって後悔と、どつちみち、ぶち切れてたんだからと思う開き直りと。

戸口を出ようとする間にチャイムが鳴って、先生が現れた。

「なんだ、どうしたんだ!？」

驚きの声を上げた先生が、あたしとこの男を確認して、絶句する。

大鳴先生の顔がためらうのを見て取って、先生は助けにならないと察した。

「こいつ、しばらく借ります」

言いながら男は、担任の返事を確かめる間もなく、あたしを担ぎ上げた。

「なにすんのよっ」

「やったことの責任は、とつてもらおう。自分でも受けて立つと言っただろ」

担がれたまま、廊下を進んでいく。どこに連れていかれるかわからないのに加えて、身長がとても高いから、目線も普段とは違つて怖さは倍増。

授業が始まつて静まり返つた校舎から、渡り廊下へと抜けて、実習室や音楽室の並ぶ第三校舎へ入つた。人の気配がないから、この時間はほとんどの部屋が空いているようだった。

第二音楽室へと向かい、ドアを開けて入ると、ヤツは片手で迷わず鍵を閉める。そのまま中へと歩いて、グランドピアノの蓋の閉ざされた側面へと体を押し付けられた。

目の前に立ち、見下ろしてくる、冷たく、激しい怒りの溢れる双眸。

その眼差しを見ていたら、何すんの、とか、何するつもりよ、とか。言葉が出なくて。

気迫だけでは負けてはならないと思うと、その目から意識をそらせなかった。

触れると切れそうな、緊迫した息遣いが流れる。相手との距離は、三十センチもない。

……なんで、あたしたち、見つめあつてるんだらう。一呼吸も、相手から目をそらさず。

お互いに切りつけるほどの意思を持つて相手を見つめて、怖いのに、逃げ出したいのに、自分から逃げることも許せずにいる。

ここで、「ごめん」と言えば、この男はどんな反応をするのか、興味がありながら。でも、あた

しもこの男も、単純に折れ合うことに関心がないのも、肌で感じている。

何かが、ぶつかると。強く、鋭く、干渉しあっている。あたしと、この男の、何かが。

似た者同士。そんな言葉が、浮かんできてくる。そんな生易しい言葉では、説明しきれないけれど。

「うちの一族は、気が強い女が多い」

一族？ 問い返そうとしても、それは発せられなかった。唇が、塞がれていた。

——う、そ。

予感が、なかったわけじゃない。甘い期待ではなく。鋭い怒りで、徹底的に壊されそうな予感。でも、現実になつたそれに、あたしは頭が真っ白になつた。

逃げられない。そう思つたら、どうにかして逃げたくなって、体が抵抗した。

押さえられている全身を、必死で解放しようとする。けれど、動けば動くほど相手の力は増していき、あたしは、体どころか指先一つ、呼吸さえ、自由にできなかつた。

激しくなるキスに、血の一滴まで悲鳴を上げている。舌を噛んでやろうとしても、かわされて。片手で押さえられた顎が、せめぎあつて零れた雫で濡れた。

……ラベンダーの、香りがする。人の唇の感触を、あたしに初めて教える人の匂い。

心まで絡め取るように忍び込んで、この瞬間を、あたしに刻みつけていく香り。

抵抗を弱めたあたしの顔から離された手が、脇の下から制服のファスナーを引き下ろし、むしり取る動きでリボンを外す。首から胸元へと指が滑り、何をされているのか理解した途端、恐怖で相手を突き飛ばそうとしたけれど、男性の力の前には非力だった。



激しい抗いで、ピアノの蓋が浮いて、体で擦られた鍵盤が音を立てる。

誰もいない音楽室に鳴り響く、乱れた狂音。心臓を震えさせる低く重い音が、ここにある信じられない現実をあたしに突きつけた。

「い、やつ……！」

自由になりかけた口で、叫んだとき。唇が離され、食い入るように見つめられる。

「俺を怒らせるな」

鼻先と鼻先が触れ合うほど、そばで。呼吸と呼吸が、深く混じりあうほど、そばで。

その声を、感じる。

「男を馬鹿にすると、どうなるか覚えておくといい」

はだけたセーラー服の中に滑り込んだ手が胸に触れ、あたしは脅えて首を振る。

やめて、と言いかけたそれが、再び唇で塞がれ、キスで呑み込まれた。抱えられ、ピアノの蓋の上に腰を乗せられて、スカートが捲れ上がった状態で動きを封じられる。

左手で抱き寄せられ、セーラー服用の下着とブラの上から胸を揉んだ右手が下へとおりて、スカートをさらにたくし上げる。太股を撫で上げられて、あたしは竦み上がった。激しい口づけで息がつまり、喘ぐと口を開いて、もつとキスが深まるのを許してしまう。

男の手は迷わずに足の付け根を辿り、ショーツの上から下半身を擦った。上下に動いてそこを確かめる指に、キスを受けたまま呻き声を上げる。

足を閉じようとしても、ピアノの上で膝を広げさせられ、男の体に押さえ込まれていて、敏感に

なった部分を庇うこともできない。そして、何度も擦られるうちに、徐々に甲高くなる自分の呻きを聞いた。——最悪な状況なのに、体が反応してる。狂おしい口づけと、執拗な指の動きに、理性と自我の抵抗が、あつけなく突き崩されていく。

反応する体に自分で驚愕する。どうしてこうなるのか、わからなかった。

高くなる声に手応えを感じたのか、指の動きが速さを増した。

「ん……っ、ん、んっ」

呻いて、泣きそうになる。怒りよりも、恐怖よりも、強い衝動で。

直後、指が離される。その瞬間、安堵を超えて、理由の見えない哀しさに襲われた。なぜ哀しくなるのか、空白になりかけた頭の中で必死に答えを見つけようとして、肢体が強張った。ショーツの中に入れられた指が、容易く、あたしの中心に触れてきたから。

濡れた肌の上を、初めて知る他人の指が、泳いでいく。水を得た魚のように、自在にくねる動きで。直に訪れた刺激に、喉を振り絞るような悲鳴が漏れた。

「ん、あっ」

速いリズムを刻む摩擦が、あたしの意識を飛ばした。

間髪を容れず、体に何か突き入れられた。鋭い痛みに、失いかけた意識が掴み寄せられ、目を見開く。そばにあるのは、冷静な光を湛えた——エメラルドの瞳。

「痛いのか」

キスを弱めて咄かれ、言葉なく頷いた。抗いも、責めも、もう声にならない。

「……処女だな」

独り言のように言い、指が抜かれる。下着から手を引き出すと、押さえていた体から離れて唇を手の甲で拭い、あたしを一度正面から見据えた後で背を向ける。

あつさりとした離れたあいつと、無様な姿で放置されている自分に困惑して。たくし上げられていたスカートを直しながら、辛うじて発せられる言葉を背中にぶつける。

「どうして、こんなこと、するの」

少しだけ、わかっていること。徹底的に、あたしを辱めようとしたんだ。この男は。

愛情も何も無い、初めてのキスの痛みにも襲われる。あたしの中に押し入った、あいつの指が教えられた感触と痛みが止まらなくなり、涙が零れかけた。けれど、この男には見られたくなくて、ぐつと奥歯を噛み締める。

知らない味が、口の中に残っている気がする。喉を流れ、体の奥まで染み付いた気がして、吐きそうになった。

「……許婚って、なんなの」

ギリギリで自分を保ちながら、音楽室を出ていく後ろ姿に、再び疑問を投げかける。

「先生から聞いたの。何の冗談？」

返事はなかった。代わりに、ピシヤッと音を立てて、ドアが閉められた。

廊下を歩く足音が遠去かり、全身から力が抜けていく。

体の奥が痺れて、ぼんやりする。……わかっている。悪いのは、あたしだ。

かけられた水でまだ湿っている制服や髪を直して、パンツと思いつき、両頬を叩いた。

しっかりとしなきゃ。とにかく今、この思いを吹っ切るために。向こうが売ったケンカを買ったのは、あたしだ。隙があったのも、あたし。こうなったのも、自分の責任なんだから。

深く呼吸して、自分を抱きしめて落ち着けようとする。落ち込んだり、泣いたりしてちゃ、駄目だ。レイプされたわけじゃない。そこまではならなくて、よかったと思おう。

唐突に置き去りにされて芽生えた空虚に、言い知れない絶望を感じても、突然の出来事に混乱した錯覚だ。最悪の事態は免れたのだからと、心を宥めて、立ち上がる。

音楽室を出て、力の入らない足取りで第三校舎を歩いていると、曲がり角で小走りに来た人影とぶつかりそうになる。檀君だった。

「高橋！ よかった」

目を見張ってあたしを見てから、肩で息をつく。

「さすがにやばいだろって思って、周りの男に声かけて、探してたんだ。あいつ、本気で怒ってた。男の俺らでも、背筋凍ったし。……で、探してこっちまで来たら、あいつが第三から出てくるのが見えたから」

動揺しているのか、早口で言う。それから、あたしを安心させるように苦笑して、手にしていた上履きを足元に置いてくれた。あの男に投げつけてそのままになっていたものだ。

「つうか……大丈夫？」

「……うん。大丈夫」

思いもよらない心配が、嬉しいけれど。檀君には、今の姿を見られたくなかった。何があったのか、悟られたくない。緊張で強張る口元に、ぎこちなく笑みを浮かべる。

「何もないから。ほんとに」

「顔色悪いな……保健室で休んだほうが、よくない？」

「……そうかな。うん……そうかも。そうする」

「保健室まで、一緒に行くよ」

言われて、一人で行くからと、首を振った。すぐにでも、彼から離れたかった。

髪を手櫛で撫でてつけて落ち着かない気持ちをはぐらかしていたら、小声で檀君が言った。

「無理すんな」

「……無理してないよ？」

見透かされているのではと、どきどきしながら答えると、ためらうような眼差しで、見つめられる。

「ずっと、声が、震えている」

片手が思わず、唇を庇うように動いた。腫れて、名残りがあるかもしれないそこを見て、彼は、あたしとあいつにあったことに勘づいたのだらうか。

行こう、といたわる口ぶりで、促されて。

俯くあたしに、檀君は、優しく言った。

「何もなかったのは、わかったから。でも、無理すんな」

彼は、あたしを気にかけてながら、近づきすぎないように歩いてくれた。

斜め前をゆっくりと歩いてくれるその優しさに、壊れかけた心のどこかが、癒されるような思いが込み上げてくる。

崩れそうになるあたしの一部が導かれるように、保健室までを、ゆっくりと歩きながら。

その距離に心を委ねて、自分を支えようとしていた。

自分の身は自分で守らなきゃいけないんだと痛感しながら、家に帰ってあたしはすぐにシャワーを浴びた。洗い流しても、あいつに刻みつけられた刺激の余韻が肌に残っていて、怒りと屈辱で心が爆発しそうだった。

絶対、絶対に許さない、あの男！ またおかしな真似したら、ただじゃおかない。あたしにだって、人として女の子として、尊厳でもあるのよ。馬鹿にするな!!

シャンプーのボトルをガコンツと壁に投げつけたところで、気持ちが悪くなるわけじゃないけれど、何かに当たらずにはいられたかった。

長々とシャワーを浴びてから、イライラが収まらないままバスルームを出る。

何が苛立つって、反応してしまった自分も許せない。

男子は必須科目、女子は選択科目と言われる、いわゆる“一人遊び”の経験もなく、性への関心も薄かったせいなのか、ああいう感覚に襲われるとは知らなかった。

あれが、俗に言う、“カンジる”という……やつなのだろうか。全身が震えた直後に、熱い火花が背骨を走って、意識が弾けて真っ白になった、あの感覚が……

思い出して、あたしはバスタオルを被ったまま、濡れた髪を散らして勢いよく頭を振る。

っていうか。やめようよ、あたし。おかしいでしょ、あたし。

宇宙一嫌いだと断言できる男に触られて、カンジてしまうって、おかしすぎるでしょ！

そういうモノなの？ いや、違う気がする。

ああいうのは、ちゃんと好きな人としてこそ、じゃないの？ 例えば、檀君とか。

「違ってる」

一人突っ込みを入れて、バスルームのドアに頭を打ち付けてみる。

そっちに行かないで、あたしの思考。これ以上、自分の頭がいかれてるなんて思いたくないし。

あたしの体がおかしいのか、あいつの指がおかしいのか。

……あいつの指であってほしい。きっとそうだろう。絶対そうに決まってる。

あれだけの美貌の持ち主なら、経験の百件や二百件あっても驚かない。そうだと思おう。

この件に関しては、あたしは潔白よ。あたしの体がおかしいんじゃないわ。

結論づけて、とりあえず強引にこの件に決着をつけると、風呂上がりの冷たい牛乳を飲む。

腰に手を当て、ぐっと一気飲みするこの瞬間が、最高。

「ずいぶん長く浴びてたわね」

シャワーを使っているうちに帰宅していたお母さんに声をかけられて、驚いたあたしは、牛乳を飲み終わる寸前にむせてしまった。口の周りを白くして、恐る恐る振り返る。

「キャミソールにパンツ一枚でうろつくのはやめなさい。女の子なんだから」

食事の支度を始めながら小言を言われ、心拍数が急上昇してしまった。

…：なんか、バれてない、かな？ あたしの体、おかしくない…：よね？  
娘にあんなことがあったなんて、即座に母親に見破られたら。すぐにじゃなくても、知られてしまつたら。もう生きていけない気がする…：恥ずかしすぎて。

「どうしたの？ 真っ赤になつて」

「のぼせたの」

バスタオルで髪を拭くふりで顔を隠して、逃げるように寝室に引つ込んだ。二人で使っている寝室には、あたしの勉強机も置いてあつて、お母さんが寝るとき以外は自分だけの部屋みたいになっている。部屋着のTシャツタイプのワンピースを着てから、思い立って、机の上のノートパソコンを起動した。

あいつと繋がりがあるかもしれないと先生が言っていた財閥についてしばらく検索してみたけれど、納得できるような情報は得られなかった。知名度のあるロックフェラーとは違って、活動をメディアに公表しないとか。でも、巨大な同族企業としても知られるスマクラグドス財閥は、世界の富の三分の一を有していると推測されるとか。徹底した情報規制で管理されていて、謎も多いという観察と推論の情報がほとんどだった。

なんだか、あたしの思考では、理解不能。というか、婚約とか言われても、こんな世界との接点はカケラもないわよ。あたしは、フツの、ごくフツの、女子高生だし。好きな人に告白して、あつさりフラれる、地味な女の子なわけ。

あの外人と、なんちゃら財閥が、関わりがあるんじゃないかというウワサにマトモに反応して、

調べちゃつたのが馬鹿っぽい。

帰宅が早めるときは食事の支度を全部してくれるお母さんに、「ごはんよお」と呼ばれたのを機に調べるのは諦めて、パソコンをログアウトした。

お母さんには、何も聞けずにいる。心配させたくないし、確かじゃない情報に振り回されるのも嫌だから。事情を知っているんじゃないかと聞きたい気持ちは膨らんでいるけれど。

それで、夕食のときに、「スマクラグドス財閥って、知ってる？」と、切り出してみた。

どういう反応をするかと窺うと、ビールを飲みながら「なにそれ？」という顔をされる。きよとんとしてサラダのキュウリをポリポリかじっている表情からは、何か隠している様子は一切見えな

い。  
それであたしは、お母さんは何も知らないんだと、心で断定した。知っていたら、許婚がどうのなんて、あたしに黙ってるわけがない。

「たまには、サラダにトマトをつけたいわ」

「あたしがトマト嫌いだって、知ってて言うのやめて」

娘の文句に肩を竦める様子を見ながら、もうちよつと話を押してみる。

「そういえば、お父さんって、なんていう名前だったの？」

お母さんは一呼吸おいてから、聞き覚えのある名を口にした。

「ダニエル」

「それは、日本でいう下の名前だね？ 名字は？」

「名字、知らないのよね。お父さん、記憶喪失だったから」

「……………ナニか、いま、あっけなく言われたけど。キオクソウシツ…………！」

「この前、誕生日の日ね。お父さんのこと阿見香に訊かれたでしょう？ おいおい話すって、そのときはぐらかしちやっただけど。もう、話してもいいかな、と思つて」

「記憶喪失の、どこの人かわからない男の子供を産んだの!？」

ソレがあたしなんだけどっ。

「流れでそうなっちゃったのよ」

悪びれる風でもなく、あつけらかんと言う。だから、籍も入れられなかったの、と。

「なんなの、そのアバウトさは！ どういう神経してんのよ!? おかしいでしょ、それ!!」

「だって、恋しちやっただし。ダニエルもお母さんのこと、好きでいてくれたから」

恥ずかしげもなく。しかも思い出し笑いが幸せそうだから、突っ込み続ける気力が減退。

「じゃ、そのダニエルつてのも、本名ではないんじゃない？ 記憶がなかったなら」

「本名とは違うわね。記憶がないっていうのも、お母さんは疑つてたの。彼には最後まで、言わなかったけど」

突然、病気でいっちゃったしね、と寂しげに瞳を伏せる。

また、立て続けに、おかしなことを言うし!!

「なんで、疑つてたの!？」

「パスポートこっそり持つてたのよ。亡くなる前には片付けたみたいで、他界した後で、親族に連

絡したほうがいいかと思つて探したら、なくなつてたの」

「じゃあ、本名、わかつてるわけ？」

「スペルが読めなくて。本人に聞くわけにいかないし、そのままになっちゃったわ」

息をついて首を振る母親に、あたしはまた胸騒ぎがしてきて、食い下がった。

「どんな名字だった？ さっき言つたみたいのとか？」

「ん〜？ それもよく憶えてないのよねえ」

相手の死とともに追求する気持ちも一切なくなつた様子で、いまこの話の最中でも、あつけらかんとしている。

「なんかお母さんて、ヘンな人だなあ、世間ズレしてるなあ、と、思うことはあつただけど。間違いなく、つていうか想像以上に、ヘンな人だったんだね」

「そうかもしれないわね」

ふふふつと笑つてから、少し真剣な顔つきになる。

「まあね。お父さんの自称記憶喪失を受け入れる気持ちになつたのは、あの人が病院に運ばれてきたときを知つていたから」

飲み終えたビールの缶を、もてあそびながら、小声で言った。

「当時、新米栄養士として働いてた病院に、全身ひどい傷だらけで運ばれてきたの。それで…………入院して数日は、よく錯乱してたのよ」

「錯乱？」

「ボクハコロサレル。タスケテクダサイ」

言いながら、お母さんは、辛そうに眉をひそめた。

「たまたま私が、食事調査で担当になったのね。何が食べられるか、好き嫌いやアレルギーもわからなかったから。そのとき、腕を握られて…：片言の日本語で、必死で助けを求められたの。…：なんだかわからないけど、守らなきゃ。助けなきゃ。そう思ったのよ」

それから、悲しげに微笑する。

「でも、後悔はしてないわ」

あたしは、自分の手の指先が、冷たくなってるのを感じた。

「ボクハコロサレル。タスケテクダサイ」

お父さんは、外国人で、追われている人だった。そして、突然現れた、外国人のあの男、仲間たち。年齢も学歴も誤魔化して、あたしのクラスに入り込んできて。

また、鳥肌。今日の帰りも、尾行されていた。いつも、同じ人だ。

もしかして、お父さんの代わりに、いまはあたしが狙われてる？

「阿見香？ どうしたの、真っ青になって」

驚いているお母さんが、あたしに手を伸ばす。

「もし、あたしやお母さんが、お父さんの代わりに狙われたらとか、考えたことない？」

お母さんはさらにびつくりした顔で、「ええ？」とあたしに見入る。

「平気よ。彼が他界して十四年以上、何事もなく暮らしてるのよ？ ドラマの見すぎよ」

笑い飛ばした。その反応に、あたしは心の底から納得する。

そうだよ。そういう人だから、自称記憶喪失の命を狙われてるらしい人の恋人になり、未婚で子供を産めたんだよね。わが親ながら、よく今まで何事もなく生きてこれたよ。

自分の母親を悪く言いたくないけど、大丈夫かな、この人。

シングルマザーで苦労しただろうけど、この考えのなさ、危機感のなさ、ネアカ、行き当たりばったり。明日吹く風は、明日心配すればいいのよ的な。

総合して、恐ろしい単純さ。前向きさ。あたしには、サッパリ遺伝してないものだけわ。

あたしの中に、言いようのない不安が確実に芽生えた頃、学校でイジメが始まった。

あの男に音楽室に連れ込まれてから、数日後。登校したら、机の中に置いていた古語の辞書がボロボロにされていた。

周りを見渡すと、一人の女子と目が合った。意味深に視線をそらした後、口元に笑みを浮かべて澄ましている。読者モデルの、あの子。島谷さんだ。最近あの外人にご執心の。

ホームルームが始まると、あたしは、こっそりと左隣にボロボロの古語辞典を放った。  
意味不明な顔つきで、それを注視している男に小声で言う。

「あたしに二度と関わらないで。あなたが現れてから、ロクなことがない」

一度始まったら終わらないよ、と文月のほうが警戒していた。

音楽室であつたことを、あたしは文月に言わないでいた。隠し事が苦手で、ウソが顔に出やすい

性分だから、何もなかったふりを装うのはあたしにとつては神経を使うことだった。

「味しめて止まんないよ、ああいうのは。島谷だつてわかつてんなら先生に言おう」

「でも、証拠ないし」

「証拠はともかく、イジメられたつて言うべきだよ！」

「一度ぐらいじゃ、先生も動かないよ。もう少し様子見てみる」

こういうとき、自分は、腹が据わつてるのかもしれないと思う。

小学校の頃も、「太陽を見ると目の色が変わる化け物」などと言われて、集団からのイジメを経験している。でもあたしは、絶対にメゲなかった。傷ついた顔も、動揺も、泣き顔はなおさら、絶対に見せない。相手の思うツボだから。

なんでかわからないけど、状況がヤバくなったり緊迫したりするほど、あたしは負けん気が強くなる。こんな卑怯な手を使う人間には絶対に屈しない、つて。相手に負けるのもイヤ。でも、こんな意地悪に挫けて心を弱くして、自分で自分を駄目にするのは、もつとイヤだ。

意外だったのは、あの男の反応だった。ポロポロになった古語辞典が返されなかったなど思ったら、学校が終わつて帰る間際に、「指紋鑑定に出したから」と言ってきた。

驚いて、ぼかんとヤツの顔を見上げる。高い身長は、一九〇センチ近くあるとかなんとか。

「余計なことしないで。しかも大袈裟。二度と関わらないでつて言つたよね」

自分のせいだとわかつてないのか、苦情に反応もなく、奴はこちらをじつと見てくる。

「怪我はないんだな。かすり傷も？」

は？ 何それ。心配？ それとも、罪悪感？ いや、ありえないか。罪悪感なんて感情は、持たないタイプの生物だ。心配なんかもつとするわけない、この冷血傲慢レイブ男が。

あたしは返事をせずに教室を出た。イジメを実行している人間への怒りより、この男への苛立ちのほうが強い。思い出したくないから記憶をガッチリ封印しようとしているけど、あの強引で最悪なキスも、指での陵辱も、忘れたわけじゃない。

油断すると、生々しく蘇る。あのとときのすべてが。あれから、顔を合わせても平然としているあいつも気に入らないし。ひとり、動揺しそうになる自分も、気に入らない！

なにがなんでも忘れてやる。何度目かの決意を独り言で繰り返しながら昇降口に行くと、今度は下駄箱の靴がなくなっていた。しばし立ち尽くして、溜息。

……上履きで帰つてやる。電車の中とかで見られても、裸足よりはマシだ。  
学校では体育館シューズを、上履き代わりに使えばいいや。

文月の指摘のとおり、イジメは続いた。教科書への落書きなんて、かわいらしい序の口。

参考書に仕込まれたカッター。中身が捨てられたゴミだらけのペンケース。次第に味をしめたのか、やるのがエスカレートしてきた。体育のバレーボールで集中攻撃を受けた日には、敵は読者モデルグループのみならずクラスの女子全員になっていた。文月を除いて。

その上クラス全員ならまだ微笑ましいもんで、そのうち学校中の女子、一年生までが、あたしを睨み始めていた。うちの高校は全校生徒が九百人以上、早い話が千人近くいる。その半分の、約



五百人近い女が、一人のか弱くてイタイケな女子に目をつけるって、どういふこと!? 良心や常識はないのか、あんたらにはっ。

下駄箱に使用済みの生理用品の山。人目のない場所に呼び出されての因縁付け。殴る蹴るまでにはまだ至らなくても、バケツの泥水を浴びせられること十数回。いつの間に入れたのか、鞆の中にもごっそりと紙くずがあった、暴言付きの。『暴力女っ!』『死ぬ!!』『ミカエル様に今度へんな真似したら、覚悟しときな!』『目ざわりなんだよ! さっさと消えろッ』どこで拾ってきたのか、ネズミやコウモリなどの死骸まで入ってる。ご丁寧に五寸釘まで刺して。……気が知れない。やるか、ここまで!! よくまあ、次から次へと思いつくよ。

そもそも、ミカエル様とやらにへんな真似をされたのは、あたしのほうなのよ! 公言できないのが悔しいけれど!!

最初は目に付かないようにされていたイジメがだんだんと派手になるにつれて、クラスの男子にも知れ渡っていった。檀君以外の男子は、触らぬ神に祟りナシと言わんばかりに、教室の戸口であたしとすれ違うのも避けていて、中には便乗して足を引つ掛けたり、触れるとあからさまに手で払うふりをする奴もいる。女のやることにぞろぞろと、金魚のフンみたいに。キンタ○ないんじゃないの、こいつら!? と、内心怒り心頭。

その中で、檀君だけは違った。

「人として、やったらマズイことがあるだろ」

あたしのお弁当が、机と床にぶちまけられていたとき、クラスの子たちを見回して冷静に言った。

それからあたしを連れ出して、購買で牛乳と焼きそばパンを買ってくれた。

「やってる奴らの心当たり、あるのかよ」

屋上で、自分の分のお弁当とコロツケパンを食べた檀君に聞いたされた。

「心当たりどころか、学校中の女子?」

あの外人絡みか、と言われて、苦笑を返す。

「こんなのなんでもないよ。心配してくれて、ありがとう」

檀君は、黙っていた。

「なんか、ここんとこよく、心配させてるよね? ごめん」

おちやらけて笑っても、彼は笑わない。二人でいるのも、なんだかとても居心地が悪い。

あの男との間にあつたことを、檀君は知らないと思うけれど、明らかに取り乱していた自分を見られているから、落ち着かない。

「文月もいるし、こうして檀君まで気にかけてくれて。一人じゃないから。全然、平気」  
「一人じゃないとか、そういう問題じゃないだろ」

追及されて。心の隙間に、彼の優しさが入ってくる。そこから、また瞬く間に自分が弱くなっていきそう、檀君との間に見えないシャッターを下ろそうとする。

「こういうのに負けるの、イヤなの」

「高橋」

声も眼差しも、優しすぎる。だから、自分の気持ちを吐露して、納得してもらおうとする。

「そりゃあ、キツカケは、あたしもやりすぎたのがあるんだけど。何を言われても、どんなに攻撃されても、自分をボロボロにするのはその他大勢の間じゃないもん」

あんまり、優しくしないで。

「あたしは、あたし。それ以上でも、それ以下でもない。みんながあたしを嫌いだって言うんなら、別にそれでもいい」

吐き出して、そうなんだ、と、自分に言い聞かせる。人の悪意や意地悪なんて怖くない。

「孤独だって、怖くない。それを怖いと思うから、暗く考えちゃうのよ」

檀君が、あたしを見つめている。あたしはそれに気づかないふりで、彼を見なかった。

あたし、彼女じゃないんだし。そんなに優しくされると、勘違いしちゃうじゃない。

そういう優しさって、けっこう残酷なんだよ？

「誰かに好かれるために、生きてるわけじゃない」

好かれたら嬉しいけど、あたしは、あたしだから。受け入れてもらえないからって、めげてたら、生きていくのなんて大変だ。

「……綺麗な目だな」

唐突に言われて、さっと彼を見てしまう。見ないでいようと思ったのに。

「今までも何度か、綺麗だなんて思ってたけど。日差しの下だと、瞳の色が違うのな」

「ああ……。うち、父親、外国人なの。小さいときに死んでるんだけど」

「聞いたことある。クラスでもたまに話題になってたから。外人恐怖症って、そのせい？　もしか

して、今までも、目のことでけっこうやられたとか？」

指摘されて、スルドイね、とはに cand、軽く流そうとする。

「建物の中だと黒いんだけど、太陽の下だと目立つみたいで、この目。幼稚園時代から、仲間ハズレみたいなのが、あったの。小学校でもちよくちよく」

文月と仲良くなったのは、四年生で集団イジメにあったときだった。負けたくないと思う気持ちがあっても、学校に行くのが毎日苦痛だった頃。傍観していた文月が、ある日、「綺麗な目だね」って言ってくれた。光の加減で、少女漫画の主人公みたいな目に見えるって。

それまで「このせいでイジメられてる」と思っていたのが、文月に励まされて、「唯一のチャームポイントかも」なんて、思えるまでになった。

誰かに好かれるために、生きてるわけじゃないけど。一人でも自分の存在を認めてくれる人がいたら、そういう人がいるってことに気づいたら、自分は強くなれるって、学んだ出来事になった。

あたしには、文月と、そしてお母さんがいる。お母さんは、昔から仕事の忙しい人だったけど、あたしを思ってくれている気持ちは、子供心に理解していた。だから、母子家庭で寂しいと思っても、孤独を感じるときがあっても、それはそれでいいと思っていた。

恐れても泣いても、どうにもならないこともあると、小さいときからの孤立で学んできてる。

だからこそ、沢山を求めなくても、そばにいてくれる人を大事に思えばいいんだって、シンプルに考えるのが癖になった。

檀君が怒ってくれてからも、イジメは収まらなかった。その放課後には、『ヒーリと両天秤にか

けてんなっ』『いい気になるな!!』『淫乱の尻軽っ』『悪口雑言がノートに書き殴られてあった。誰が尻軽だよ、あたしはまだ処女だ!』って、校内放送で叫びたい。絶対できないけど。その処女っていうのも、もう自分でも断言していいのかどうか、考えると切ない。忘れようとしても忘れられない指先レイプで、完璧な生娘まじりめとは言えないのが、ありえないくらいシヨックだったりする。

なんで、こんな惨めな気持ちにさせられなきゃならないのよ!

思い出せば惨めになり、気分を晴らそうにも途切れないイジメで、何をしても楽しい気持ちになれずにいた、そんなある日。お弁当箱をあげたら、いるはずのないものがそこにいた。

ミミズが、そろそろと蠢うごめいている。足が沢山の、ムカデみたいのもいる。

………………。これだけは…………。これだけは、勘弁してっ!!

何十秒か、声も出ない硬直状態になった後で、あたしは絶叫を上げていた。

「ぎゃああああああああ!!」

「きゃ」、じゃなくて、「ぎゃ」などが、ツッコミどころ満載。

それはともかく。ムシだけは。特に、この、ニヨロニヨロ系のムシだけは。

やめてええええええええつ。しかも、こんなにいっぱいいいいい!!

目が覚めたら、ベッドの上にいた。保健室だ。養護の先生は、見当たらない。

文月がそばで、本を読んでいる。カバーをかけてるけど、たぶんマンガだ。

文月が運んでくれたのかと尋ねると、「あんた、自分がそこまで軽い体重だと思ってんの?」と、具合を心配するどころか、毒舌が返ってくる。

「すごかったよ。阿見香が気絶した後。あの男が真っ先に駆けつけてきたの。意外でしょ」

「あの男って、大天使様?」

文月は興奮気味に頷いて、話を続ける。

「それだけじゃないんだよ。そこへ檀が登場してね。誰のせいだと思ってるんだ! おまえは手を出すなっ”って、本気で怒鳴りつけたの、あの男を」

檀君が…………怒鳴りつけた? あいつを?

「本当に?」

「ウソじゃないよ。檀って、平和主義で怒鳴らなそうな奴に見えるじゃん。その壇がだから、クラスじゅう、みんなビビってたよ」

「……………」

「で、まだ続きがあつて。あいつと檀、しばらく睨みあつてたの。倒れてるあんたを間にして。結局、大天使様が勝手にしろと怒って、檀が運んできたわけ。男同士の迫力ってすごいよね! 視線でシバシバ人殺せそう。ドキドキゾクゾクしちゃった。ハンパないわ、あれは」

檀君が運んでくれた、その感慨に浸る間もなく。こわかったよ!?! と、驚きと好奇心を満面に表し一人盛り上がる悪友に、「で、どうすんの?」と、問いかけられた。

「何が…………? 意味わかんないんだけど」

かなり楽しいな文月を前に、状況も話も把握できなくて、困惑してるあたし。

「なんでそう鈍感なんだか。檀とあいつ、どっち選ぶの？」

文月が、漫画の続きでも読むようにワクワクしている。

「それ、おかしいでしょ。あたし、檀君に、断られてんだよ!? あの男は論外だしっ」

あれから、二週間あまりが経とうとしてるけど、あつという間だったような。まるで昨日のことのように、保健室まで檀君を運んだあの日の光景が、フルバージョンで脳裏を駆け抜ける。

「それは、前の話でしょ？ 今は変わったんじゃない？」

あたしは溜息をついて、文月の意見を否定する。

「それはないよ。檀君は、優しいんだよ。いい人だし、正直っていうの？ イジメとか、誰が相手でも庇<sup>かば</sup>うんだよ」

「あなたは、あの睨みきかせてた二人を見てないから」

「違うって。嫌がらせの度が過ぎてるって、この前も怒ってたもん、檀君。で、女子の大騒ぎの原因があいつなのは確かだから。それでぶつかっただんだと思うよ」

「阿見香。あなたはもう少し男を知ったほうがいい」

文月が、呆れたと言わんばかりに返してくる。

「何言ってるの？ 自分だって処女のくせに！」

「処女だって、わかるもんはわかるの！ じゃないと男をちゃんと選べないでしょうがっ」  
枕が抜き取られて、バシッと顔面に降ってくる。

「文月だって、恋愛事ニガテじゃん！ 男にダメ出しばかりして」

投げ返すと、また手加減なく叩き返される。

「ニガテなんじゃない。冷静に見てるのっ」

「見てるだけじゃわかんない！」

「私は漫画でしっかり勉強してるのっ」

「漫画で勉強って、何を？ やってばっかじゃんっ。俺の奴隷になれとか、俺だけの女でいるとか、気持ち悪い!!」

「それを気持ち悪いって言うあんたは、まだ子供なのっ！」

「えーえー子供です、レイプされてメロメロになる女の気持ちなんか理解できないし！」

文月には言えないけど、ちよこつと経験しただけでもとんでもないわよ、ありえないっ！

「レイプを持ち出しては蔑<sup>あざむ</sup>むけど、そればっかじゃないのよ。体の繋がってるのは」

「それは自分でやることやってから言いなさいよっ、耳年増！」

「男女の深い繋がりを読めない子供よりはマシ!!」

「ハダカになるのがそんなにエライってわけ!？」

「めくるめく愛の陶酔の神秘、女の喜びを理解しない人間にはわからない世界だろうねっ」

「エロやレイプに女の喜びを感じるほど、欲求不満じゃないの、あたしはっ」

そこで、あたしと文月は、同時にハッと我に返った。体の前で腕組みしているあいつと檀君が、保健室の入り口に揃って立ち尽くしてたから。よりによって、あいつが。

「君たちは、寄ると触るとその話しかしないのか？」

四人の間に痛い沈黙が流れた後、絶句したままの檀君の隣で、奴が呆れた顔で言う。あたしを捉えた目の端に嘲笑いを浮かべて。あたしだけがわかる、視線の意味。

「廊下まで響いてた。好きなんだな、下半身の話が」

「下半身とか言わないでくれる!？」

あたしと文月が、合唱してあいつに怒鳴りつける。

あんなにそこを突っ込まれたくないよ、と言いかけて、再びハッと我に返る。

「どのあたりから聞いてたの?」

こわごと、問いかけるあたし。

「自分だって処女のクセにから」

こいつの口からは、聞きたくない言葉だ。明らかにあたしを蔑んでいる。あたしのカラダに指を入れて、そうほざかれたことを、嫌でも思い出してしまう。それでなくても、美貌の外人に冷静に吐かれると非常にハズカシイものがあるのに。ひとまず、この場ではこつそりと胸を撫で下ろしてみる。会話の全部は覚えてないけど、聞かれてまずいことは多分聞いてなさそうだ。元はといえば、文月の思い込みから生まれた話だったわけで。

様子を見に來ただけだからと、檀君はざつさと帰ってしまった。女同士のキワドイ会話に、恐れをなしたのが丸わかり。せっかく前より親しくなれたのに、これで避けられるようになったら、かなり悲しいよ! うらめしく文月を見ると、文月は素知らぬふりで枕と漫画を拾い上げ、倒れたス

ツールを元に戻している。

「席をはずしてくれないか」

「そのつもりでした。椅子どうぞ」

遠慮のない大天使様からの要求に、文月は心得ていたように言う。

そして自分は漫画を片手に、保健室を出ていってしまった。ドアを閉める直前、焦るあたしに、チラツと意味深な視線をくれて。そのつもり、って……文月のヤツ!

「何の用ですか?」

沈黙を避けたくて、立ったままの彼に、なんとなく敬語で話しかけた。

ガチガチに緊張しちゃってるよ……。音楽室での一件以来、二人きりになったのはこれが初めてだし、異様に気まずい。しかも、唇や指先ばかり見てしまうのが、かなりヤバイ。

「君の、父親のことなんだが。お墓はどこにある?」

単刀直入に切り出された。気まずさなど微塵もない表情が、あのことを思い出してしまうのはあただけなのだと示している。一人嫌な気分に分かれて挙動不審なんて、最悪。あんなことをしておきながら本人が知らぬふりって、どうなのよ。どういう神経の持ち主なの?

しかも、君の父親の墓。文月が言っていたように、うちの事情は調べあげてるわけね。

「ないです。母がまだ作ってないから。洋風にするか和風にするか決められないとかで。日本風のお墓にタテ書きで、『ダニエルの墓』じゃおかしいでしょ、って言うんで」

「………………。ダニエル?」

「父の名前です。母は自分が死んだら一緒のお墓に入れたらしくて、遺骨はお寺に預けています」  
怪訝な顔をしている彼にかまわず、つつけんどんに答えた。いろんなことが筒抜けみたいなのに、  
今さら逆らうのも面倒だった。

「そこは、誰でも行けるのか？ 故人の弔いに行きたいんだが」  
とむらい、という日本語がさらっと出てくるのに、今更ながらに舌を巻く。外人の皮をかぶった  
日本人なんじゃないの？ って、疑ってしまう。飛び級で九歳でケンブリッジ大学入学、十一歳首  
席卒の情報も、ガセじゃないかもという思いが強くなる。

もしかしたら……たぶん、そうなのかもしれない。こいつの、超然とした態度。それから、どん  
な局面に置かれても揺るがなそうな、人格の骨組みの隅々にまで確立された自信みたいなものを感じ  
ると、疑問の余地はない気がする。

誰でも行けると答えると、彼は少し黙ってから、また質問してくる。

「君は、父親から、何も聞いてないのか？ 母親も？」

形のいい唇の動きすら、やたらと気になってしまいう後遺症に心の中で毒づいた。

あたしもおかしいけど、平然としているこいつが、さっぱり意味不明。

「何も知らないです。あたしも、母も。父は記憶喪失だったそうですから」

だから、あたしたちは何も聞いていないし、何も知らない。これからも関わりたくない。放つて  
おいてと伝えたくて、そう返事をした。

「記憶喪失？ 本当なのか？」

驚いた声に、あたしまでビクツとさせられる。皮膚そのもののように張り付いていた、彼の冷静  
さが、ほどけた瞬間。

「そう聞いてます」

それでダニエルなのか……と、ぼそつと呟いている。自分に納得させるように。

「あたしも、質問していいですか？」

彼が返事をする前に、あたしは言った。

「あなた、いったい何なんですか。どうしていきなり、あたしの前に現れたんですか？」

彼は、気が重そうにこめかみを押さえながら、微かに息をついて、簡潔な答えを投げた。

「親戚。君の父親は、俺の叔父だ。父の三番目の弟だった」

頭の中で、思考の整理がつかない。……叔父？ 父の三番目の弟？

え……？ え？ それって。あたしと、こいつが——従兄妹ってこと!?

「君と俺は、従兄妹だ。この前に会った二人も、君の従兄妹だ」

「うそでしょう!？」

「一つ言っておく。身辺でおかしなことがあったら、俺に報告してくれ」

身辺でおかしなこと。あんたがそれを言うか。深い溜息を隠さずにあたしは言い返した。

「はつきり言っておくけど。あなたが、あなたたちが現れた以上に、おかしなことはないわ」

先生は許婚がどうか言っていたけど、イトコ同士って、結婚できるんだっけ？ 血が濃すぎる

二人に子供ができると体が弱くなりやすいとか、医学的にも避けたほうがいいとか、テレビでも見たような。いや、イトコの話も本当だとはまだ限らない。許婚がどうかは、論外だし。何だか、あれもこれも雲を掴むような話でさっぱりわからん。

「昨日のバトル、すごかったな」

翌日、登校したら檀君はもう席にいて、それまでと変わらない感じで笑いかけてくれた。

ああ、よかったつ。軽蔑されて避けられたら、どうしようかと思つてた！ 保健室に運んでくれたお礼を伝えると、檀君は気にするなよと言いながら、あたしに訊いてくる。

「何の話だったの？ 昨日の放課後、保健室に行ったらまたま行き合ったんだけどさ、大天使様。高橋に話がありそうだっただろ」

もしかして、それで、さつさと帰つたの？

「別に。何でもないよ？」

人のことをよく観察してるんだなど、驚かされる。けれどあの話は、檀君にするものじゃないので、はぐらかした。

内緒話かよ、なんてからかうように言われて、「違うよ」とあたしはしかめっ面をする。

親戚みたい、なんて話は、誰にもできない。自分でも信じられない気持ち百パーセントだし。だって、親戚つて、もう少し似てるもんじゃない？ あたしとあいつの間、それから他の二人との間にも、虚しいほどに共通点がない。あたしも信じてないし、誰が聞いても信じないはず。東洋の遺伝子が強烈だった可能性もあるけど。

「自分が嫌がらせの原因になつてるクセに、おまえに謝罪もないのか？」

「あの男が、人に簡単に謝る性格に見える？」

二人で苦笑している前を、あいつが素通りして隣に着席する。あたしが肩を竦めると、檀君も眉を上げて応じた。

その後も机の裏にガムが大量に付けられていたり、体育の時間に集中攻撃を受けたりして、うんざりして更衣室に戻ると今度は制服がなくなつていた。着替えられなくて困っていたら、文月に引っ張られて更衣室から連れ出される。

「いま、トイレ行つたらさ」

憤慨したように言い、着いた先には水洗トイレに浸かつた制服があつた、あたしの名札付きで。ヤバイかもよ、と警戒する文月に、首を振るしかない。

「捨てられないよ。買い換える余裕ないもの」

想像もしたくないモノが流されないうまま、浸け込まれていたとしても。用務員室でもらつてきたビニール袋に制服を入れてロッカーにしまう。あの男が現れてから最悪がエスカレートしっぱなしだ。

次の授業は、体操着のままが出た。目立つだろうけど、自分が恥じ入ることは何もない。昨日、バトルまでしてくれたことが功を奏さなかったと檀君に知られるのだけが、辛かった。

檀君も、あいつも、こつちを見ていた。あたしは、素知らぬふりで着席して前を見る。

「なんだ、その格好は」

現代社会の授業中、先生に問われて、「汚しました」とだけ告げる。

そこで、バンツと、物音がした。何の音かと思回してみる。隣から聞こえたような。

「どうした？ 檀」

先生に訊かれた彼は、「なんでもありません」と答えて丸めた教科書を手から放り、あたしを通り越して左隣の男を見た。あいつは、それを察しながら無関心を装っている。

これまでは、授業中は、まあまあ安息の時間だった。左も右も気を遣う相手でも、左隣の「答案交換」などの共同作業の絡みがなければ、息をつける範囲だ。でも、今は何か、激しく疲れている。男同士の間にあるらしい、辛辣なものの原因が見えないだけに、身の置きどころがないっていうか。文月の話も、大袈裟なものじゃなかったのだと思う。問題の原因があたしかどうかは別として、相性が究極的に悪い二人なのかも。

翌日からは週末の二日連休で、制服をクリーニングに出して休息できたのも束の間、再び気の重い週明けになり、登校して早々に一番顔を見たくない奴と遭遇した。なぜかいつも、校門の手前でこの人と行き合うのだ。彼が車で通っているのを見たこともある。学校の少し手前の裏通りで降りて、白い手袋をした運転手にドアを開けられて、「いつてらっしゃいませ」なんて頭まで下げられていて、エラソーな匂いプンプンだったのがどうにも癪に障った。ますます、「そんなご大層にするぐらいなら来んなよ！」って言いたくなる。

それでなくても今日は生理がきていて最低な気分なのに。体育も休もうかと思っただけれど、体を動かして気持ちを入れ替えたくて出席した。

今日は、女子はハードル競争で、男子はサッカーだった。同じ校庭でみんなが体育をしているときに、一人、校舎のそばの木陰に佇む外人男。また携帯をいじってる。四六時中いじってるんじゃないだろうか。

力が出し切れないまま走り終えて、先生の指示でハードルを用具室に運んだ後、クラスの女子にハードルの整理を押しつけられ、あたしは一人居残っていた。ちよつと体がふらついて、やっばり休めばよかつたかなと思いつながら。

ハードルの整理を終え、用具室を出て校舎のそばを通って校庭に戻る。みんなが集まっているのが見えたとき、急に立ちくらみに襲われた。——やばい、貧血かも。

遠のきそうな意識で思ったあたしに、文月が何か叫んでる。「うえ！」と聞こえて見上げたら、すぐ真上に、黒い物体が降ってきていた。

ナニ、コレ？ 思った直後、体が、すごい勢いで突き飛ばされる。

倒れるより先に、間近でグシャッと破壊音が響く。

校庭に転がり込んだ拍子に打ちどころが悪くて、あたしはまた気絶してしまった。助けてくれた相手が、誰なのかも確かめられないまま。

気づいたときは、また保健室だった。最近やたらと縁がありすぎるどころだ。

つい数日前とオーバーラップして、文月がいるのだと思いついてその姿を探したら、あいつがいた。スツールに座って長い足を持って余すように伸ばし、携帯をいじっている。他に人の気配がしないから、また二人きりみたいだ。



「授業は？」

マヌケな問いをしたと思う。けど、それ以外に言えない。びっくりして。

「俺は、休憩」

言って、あたしを観察している。……休憩って。それって、サボりだよな？

「君はよく気絶するな」

仄かに、笑みが浮かべられた。認めたくないけど、見入られたら見惚れない人は宇宙に一人もいないのではないかとすら思えてしまう、その瞳。

笑うんだ、この人。驚愕きょうがくなんですけど。

「憶えてないんだけど、何があつたの？」

「プランターが落ちてきたんだよ」

プランター……植木鉢が？ そんな、漫画みたいな。なんて、呟いて、苦笑する。

また嫌がらせ。あの手この手と、よくやるよ。さすがに、苦笑にも力が入らない。

「帰りは送る。これから車を回させるから」

「……は？」

耳を疑う言葉に、正気に戻る力がよみがえる。帰りは、送る？

「なんで、あなたがそれをするの？」

レイプ魔と二人きりでいることに警戒しながら疑問を告げると、簡潔に返された。

「義務だからだ」

義務。おまえなんか嫌いだと言われるよりも、冷たい言葉に聞こえる。嫌いだけ関わりたくないけど、義務なんだから仕方がないだろ、みたいな。平然と、しかも嫌そうにそれを言う？ この男、マジで性格悪いんじゃない。送るのは、イジメを受けてるあたしに責任を感じてってこと？ 嫌々ながら、しぶしぶながら、手助けしてやるって？

人を、口にもしたくないやり方で辱めておいて、やめてよね。

「タクシー代、持っていたら貸してくれる？ 後でお母さんに言っただけだから」

「送られるのは、迷惑だとしても言いたそうだな」

静かな声で彼が言い、あたしはありのままに応えた。

「あなたが、嫌いな。今まで会った人間の中で一番嫌い。当然でしょう？」

吐き出したそのとき、ベッドに倒されていた。驚きより早く、音楽室での出来事が瞬時に蘇る。

——とっさに、「待って！」と口にしてた。

「今日、生理だから！」

あいつの体の下にいる状態で、この口は勝手に何を言うんだと狼狽ろうたいしまくり。確かにその日とはいえ、「そうじゃない日ならオッケーよ」って誘ってるのだからって思われるよ！

「へえ。その気満々とはね」

虚を衝かれた顔をしながら、押し倒したあたしを見下ろしてくる。

「違うっ、そうじゃないの。だから、えっと、絶対やっちゃいけない日らしいし、自分を守れるのは自分だけだし、それで」

「やっちゃいけないってことはないな。心配は無用だ」

突然押さえ込まれた体勢に気が動転しながらも、あたしは、そっと手を背の下へと回して、ショートパンツの後ろポケットをさぐっていた。

「あたし、こういうこと、よくわからないから」

すぐ真上にある彼の瞳を注視したまま、反抗をできるだけ抑えた態度をする。テンパっているのに、見たことのないほど美しい瞳に吸い込まれそうになりながらも、自分を保とうとする。

組み伏せられたまま、どうにか動く右手を体の下に挟んで、手の中のものがカチカチと立てる音を隠した。

「妙に大人しいな」

不審を見せて彼が目を細めた直後、首の頸動脈けいどうみゃくにカッターを突きつけた。

「動かないで」

男なのに艶なまめかしさのある白い肌首筋に、鋭い刃を当てる。ぎりぎり触れない距離で。

自分の身は自分で守らなきゃ、いざという時に誰も助けてくれない。こいつに教えられたことだ。学校で襲われて以降、あたしは、手のひらに納まるサイズのカッターを、制服や体操着、私服の時にも用心して、ハンカチと一緒に押し込んで持ち歩くようになった。気休めのお守りみたいなものでも、ないよりは安心できる。

「変な真似したら、正当防衛で刺すから。二度も言いなりになるとは思わないで」

彼は、首へと視線を動かすこともなく、少しも目をそらさず、あたしの目を見つめてくる。あた

しも、動じない意思を瞳に込めて、彼を見返した。

エメラルドの瞳に、煌きらめきが映る。我を忘れそうになるほど美しい瞳だけれど、いま、煌きを増したものが危険なものであることは、あたしも本能的に察していた。

「その根性と気力は買ってやるが、動きに隙がありすぎる。何をしているかと思えば」

言うが早いか、右肩を、関節が外れるんじゃないかと思う力で掴まれた。

「あっ」

激痛に声を上げたあたしの手から、あえなくカッターが滑り落ちる。間髪を容れずに彼の手がそれをベッドから弾き落とした。その片手で、あたしの両手を頭上で押さえて、もう片方の手で首を絞めるようにして顎が上向かせられた。

「君が俺を襲うのは無理だ。今後は愚かなことは考えないほうがいい」

体操着が胸元までだけられて、噛み付かれる。深めのVネックで制服用の下着に指定されているセーラーズニットの、襟のラインのギリギリのところに鮮やかなキスの痕あとが残され、直視できずに顔を背ける。胸の膨らみに、下着の上から顔を埋める彼を視線の端で捉えた。

「やだ……、やめてー!」

泣きそうになって、懇願が漏れる。そんなことで相手はやめないことはわかっていたけれど、言わずにはいられなかった。無駄な抵抗でも。

こういうときって、叫べないんだ。恐怖があらゆる力を奪い、自分を非力にしてしまうなんて、知らなかった。充分それを理解しているのか、脅える女をいたぶるように、あたしの喉を、熱い舌

が撫でていく。

「……どうして、こんなこと、するの？」

悲鳴にならない掠れた声（かす）を吐き出すと、彼はあたしの首に口づけたまま、上目遣いに見据えてくる。「俺も、君が、嫌いだ」

言って、ショートパンツからショートツの中へ一息に手が入られた。前触れもなく指で攻められ、彼からの行為に、いたわりや思いやりのない事実を教えられる。

潤んでいる皮膚が、最初るときよりも抵抗なく、差し入れられる指を受け入れていた。

いきなりだから、体も心も遠くに置き去りにされたまま、苦痛だけが込み上げる。

脅えを隠せない体が強張り、震えて、歯の根が合わず音を立てる。

なんで、こんなことをされなきゃいけないの——!? あたしをじつと見る双眸（そうぼう）を、非難と怒りの目で見上げることだけが、唯一残された抵抗の方法だった。

こんなに美しい瞳を、美貌を持つているのに。なんて残酷（じょうく）で傲慢（ごうまん）で、嫌な男なんだろう。

「……嫌いだからって、ここまでするの……？」

苦悶（くもん）に息を切らして見上げるあたしを、軽蔑（けいべつ）している表情で見返してくる。

「生意気な女だからだ。出会ったときから、この女だけは滅茶苦茶にして、息の根を止めてやりたかと思つた。拳句の果てに、真剣な顔で嫌いだと言ひ捨てる。ここまで腹が立つ人間は、君が初めてだ」

指の動きに苛立ちを表して中を掻き乱す。痛みが少なくなったとはいえ、されている行為が衝撃

だった。

その上、抜き出したかと思うと、鮮やかに紅く染まった指を口に含み、舐（な）め上げていた。

女性的にも見える綺麗な形の唇に、紅い指が音を立てて吸われていく。すぐ目の前で、宝石のような眼差しを、ピタリとあたしに当てたまま。——ゾクリとする。

「……何考えてんの、この男。まじで頭、おかしいんじゃないの？」

「そんなこと、しないで」

カラカラに乾いた喉の奥から声を絞り出したけれど、意味のない言葉だと思つた。

不気味さで心が自分を失いかけて、恐怖（おそ）と驚愕（きょうがく）で戦（たたか）き、涙（なみだ）が滲（にじ）みかける。

瞬（まばた）きもできないあたしの口に、彼の唇から抜き出されたその指が入られた。血の味が残る、長い綺麗な指。あたしの体の、あたしでも知らないところの感触を、知っている指。

「血縁だからな」

「……関係ないでしょ」

指が引き出された瞬間に、言い返す。こんなのと血縁だなんてますます信じたくないよ。

「誰のでも舐められるわけじゃない。気持ち悪い」

吐き捨てて、あたしの口を注視しながら、指を押し入れたり、引いたりする。

噛み付いてやりたいのに、歯が震えて、恐くてできない。

「もっと舌を絡ませて」

見つめながら言われると同時に、この事態に息が止まりかけているあたしの手が取られ、彼の口

に人差し指が含まれた。熱く濡れた粘膜と舌が、ねっとり絡みついてくる。

その感触に、全身が粟立つような震えが走った——なに、これ。

ただ指を舐められているだけなのに。そっと目を伏せたり、あたしを見据えたりしながら、優雅に、丹念に、愛撫される。

一方の手が、あたしの手の甲や手のひらを優しく辿り、手首から、柔らかな上腕の皮膚へとしっかりと撫でていく。くすぐりたいのと、ゾクゾクする感じで、胸の鼓動が激しさを増す。恐怖を訴えるものとは違う、心臓の音がする。

衝撃で怯えていたはずなのに、急に鋭敏になった感覚が、あたしの自我を混乱させている。彼の、完璧な形の唇から、出たり入ったりする自分の指をずっと見ていたら、体の奥が熱くなった。……今は触れられていない子宮を、内側から、じんじんと刺激されているように。

指先から、彼の体内へと、溶け込んでいきそうになる。嫌悪と恐怖、羞恥と惑乱。葛藤する思いの中で、必死で自分を守ろうとしながらも、引きずり出された何かを抑えることができなくなっていた。体が、中心から、どんどん反応している。指の感触が残る秘されたところまで、蕩けそうに熱くなる。

——こんな、あたしじゃない。そう思うのに。どうして、止められないの？

夢中で、彼の指を吸い上げている自分がいる。舌を這わせ、唇をすぼめたり開いたりしながら味わう。彼が、あたしの指をそうしているように。

その指を、体を、呑み込みたくてたまらないというふうには、下腹部が強く収縮している。心臓の

どきどきが流れになって、体中を駆け巡る。

何をしているのかなんて、もう、考えられなくて。冷静になることを、放棄している。

快楽を知るためだけに、この体のすべてがあるのだとすら、思えてくる。

「教えがいがありそうだな」

そう言った彼の眼差しは、熱を孕み潤んでいるように見えた。

お互いの指を唇に咥え、その指に舌を巻きつかせながら、視線を絡ませる。

そして、あたしの手を撫でていた指が、再びショーツの中に入れられた。

「——あっ」

唐突に、熱く潤んだ下半身に触れられて、悲鳴を上げてしまう。さっきまでは苦痛だったのに、今度は激しい波に一瞬にして呑まれた。聞いたことがある……これが、快感？

狂おしく中を乱され、脳裏を掠めた問いもすぐに散らされる。

「あ……んっ、はああっ」

ここが、学校だとか、保健室だとか、もう微塵も考えていなかった。

綺麗な顔のまま眺めている彼と、視線が何度も重なりあう。それも、あたしの感情を限界まで

駆り立てていく。

「経験がないわりに、君は淫らな女だな」

耳元で囁かれ、舌先で耳朶を舐められ、叫びそうになりながら首を反らす。

押し寄せてきた波に耐えようと身じろぎするあたしを押さえて、唇が重ねられた。

舌と舌が生き物のごとく絡みあうのに身を任せたまま、初めてのときよりも長いキスを受ける。  
——— なのにも、かんがえられない。

唇を唇で。舌を舌で。瞳を瞳で。……犯されて、いる。  
下半身を陵辱し続ける絶え間ない指の動きに悶えながら、あたしは呆気なく気を失った。

テンションが上がらない。タクシーで家に着いてから、布団に転がって鬱々うつづとしている。  
なんだかこのまま一生、倒れてそう。

なにやっつてんの、あたし？ っつて。頭が冷えるにつれて、青ざめてくる。嫌いな男に触れられて、決定的なことではないとはいえ、カラダを許して、どこまでバカなの？

自分に、うんざりする……。もしかして、あの男から「淫みだらな女」と言われたように、あたしつて、ものすごい淫乱なのかな……。？ 今まで自分とは無関係な言葉だと思ってきたのに、本性はそういう女なの？ っつて幻滅する。

抱えていた枕に何度目かの溜息を吹き込みつつ、保健室に行く羽目になった原因にも呆れ返っていた。

しかし……。植木鉢、落とすかよ。イジメのレベル超えてるし。まじであたしに死ねっつて？ お望みどおりにしてやりたいけどね。あたしだって、自分に絶望してるもの。でも、どんなに落ち込んでも、まだ生きている。残念ながら、鬱々と。

家に帰ってから、ずつと腰が又ケている。……。立ち上がれない。指で知った感覚と、エメラルド

## 立ち読みサンプル はここまで

のあの瞳と、体の奥の熱の名残りに支配されながら。グシャツと落ちてきたあの物音も、耳について離れない。頭に落ちていたらと思うと恐怖に駆られ、震えそうになる。

イジメになんか負けない、あの男にも負けるもんか、っつて言う気力もない。

いまは。いまだけは。すべてのことから、人間でいることから、解放されたい。

快楽に浸ひたってしまった自分も、許せない。脱力して、消えたくなる。

イタイのは絶対イヤだから、自然にこのまま、いなくなりたいな。アタマが潰つぶされてご臨終なんて、もつてのほかだよ。

明日には……。また、元気、ださなきや。

重い体を引きずるようにして学校に行けば、女子の眼差しがひときわ凄みを増していた。

どうしてくれよう、この状況。今度は何なの？ まさか、保健室でのヤバイ出来事がバレたんじや。ヒヤヒヤしていたら、「すごい騒さわぎになつたよ」と、おはようよりも先に文月に言われた。毎度興奮してるけど、文月の「すごい」に今回ばかりはビビリながら、黙もくって話を促うながした。

「倒れたあんたを抱きかかえて運んでるとこ、校舎の窓からすごい数の顔が覗のぞいてて、ワーワーキヤーキヤーと」

「あたしを運んだのって、誰？」

ヤバイことじゃなかったと、全身で息をついてから、問い返す。

「大天使様だよ。落ちてくる植木鉢から助けたのも」